立命館大学文学部考古学実習研究報告第３冊

杉沢遺跡

—SUGISAWA SITE—

2017年度発掘調査概報

2020

立命館大学文学部

目　次

Ⅰ　調査の目的と経緯……1
Ⅱ　各調査区の調査成果……3
　１-Ａ～Ｅ区・２区
Ⅲ　杉沢遺跡における礫配列と礫種……8
Ⅳ　花粉分析……9
Ⅴ　小学生発掘体験……9
Ⅵ　考古学と美術の共同展示プロジェクト……10
Ⅶ　寄託資料……20
Ⅷ　ま と め……26

例　言

1　本書は2017（平成29）年度において、米原市教育委員会と立命館大学文学部が実施した杉沢遺跡の発掘調査概要報告書であり、『立命館大学文学部考古学実習研究報告』第３冊にあたる。

2　杉沢遺跡の2017年度調査地１は滋賀県米原市杉沢458、調査地２は杉沢377に所在する。

3　調査は米原市教育委員会が主体となり、立命館大学文学部と合同で2017年8月9日～31日に実施した。高橋順之（米原市教育委員会）の指導の下、矢野健一（立命館大学教授）が調査を担当した。立命館大学学生50名の他、Claudio Pelloli（パドヴァ大学学生）、左近利幸（CPA）が調査に参加した。調査期間中に実施した展示プロジェクト担当者は第Ⅵ章に記載した。

4　本書の図中に記載した方位は磁北を表し、標高は全て海抜（TP）を表す。

5　調査に際して、ご指導とご協力をいただいた方々のお名前を記して感謝申し上げます（敬称略）。
浦辻敏明　高橋芳信　武田孝　藤田博文　玉泉寺　杉沢区自治会　伊吹山文化資料館　滋賀県教育委員会文化財保護課

6　本報告書の編集は矢野の監修のもとに、鈴木大輔が行い、小野大輔が補助した。執筆者は担当箇所の文末に記した。滋賀県立米原高校教諭坂本大介氏と同校地学部に花粉分析を依頼し、その結果を執筆していただいた。

＊表紙写真は調査終了時の１-Ｂ区（南東から）

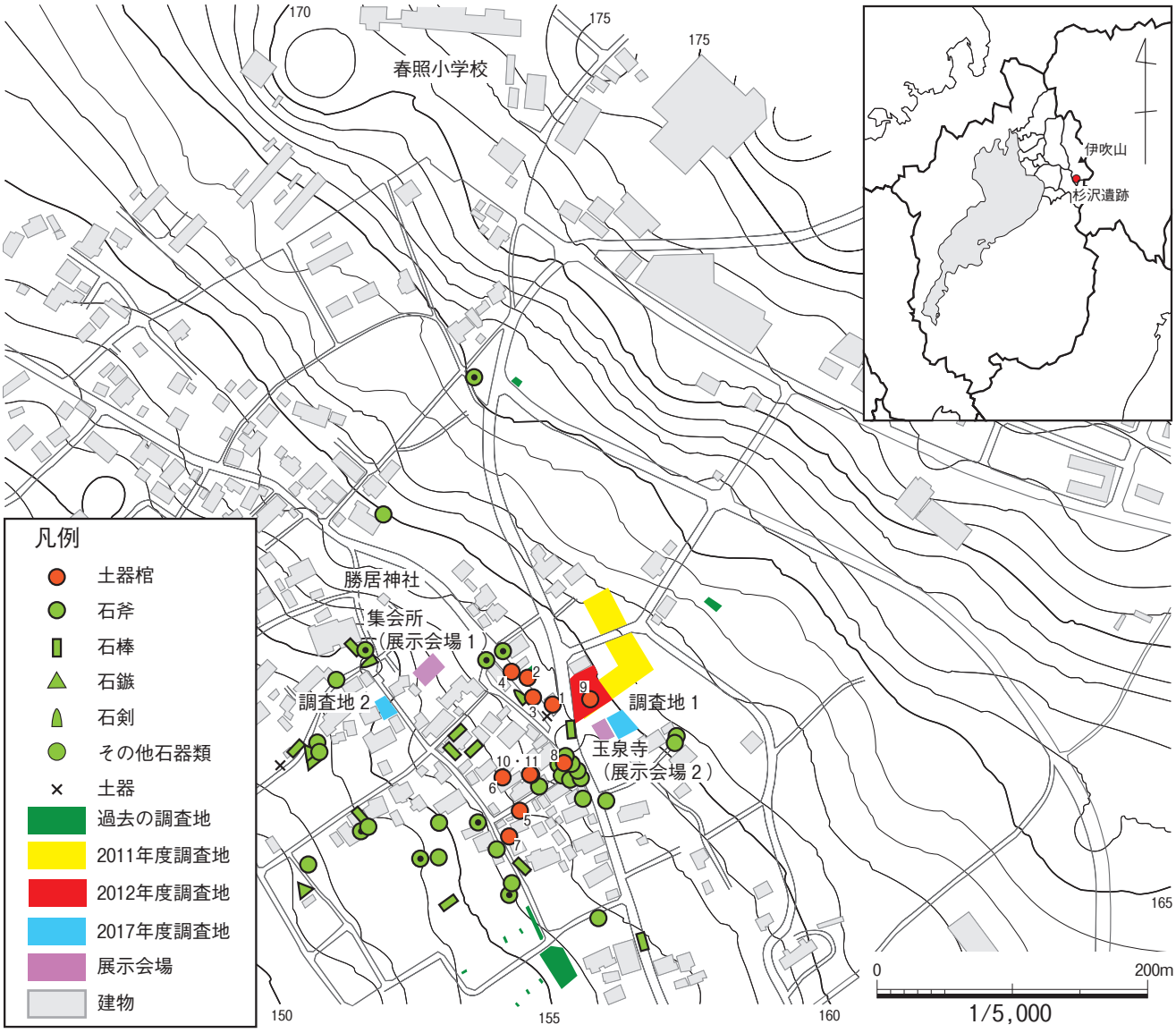


図１　杉沢遺跡の調査地と遺物出土地点

Ⅰ　調査の目的と経緯

既往の調査（図１）　明治以来、滋賀県米原市杉沢では石器が出土することが知られており、1924（大正13）年に御物石器と磨製石斧が郷土史家・中川泉三により紹介されたことが杉沢遺跡研究の端緒となる[(1)]。昭和３年にも島田貞彦によって石器類が紹介されている[(2)]。1936（昭和11）年には土器棺が２組出土した。

1938（昭和13）年、小林行雄を中心に発掘調査が行われ[(3)]、縄文晩期後半の合口の土器棺を検出し、以後、縄文時代の埋葬方法の１つとして知られることになる。以後、1954（昭和29）年には京都学芸大学（現京都教育大学）の調査で１組の合口の土器棺が発見されている。1988（昭和63）年の伊吹町教育委員会の調査では晩期前半の良好な一括資料が得られた[(4)]。1991（平成３）年の遺跡の範囲確認調査では、縄文時代の集石状遺構が見つかり[(5)]、1995（平成７）年の調査では合口の土器棺が検出された[(6)]。2006（平成18）年には焼人骨を含む合口の土器棺など土器棺２基が見つかっている[(7)]。

以上のように、杉沢遺跡からは、現在までに11組の土器棺が出土し、御物石器や鰹節形石製品など中部地方特有の石器類が採集されている。また、晩期前半から終末まで、地点を移動しながら遺跡が長期間継続していることがわかっている。

立命館大学の調査　2011年８月11日～９月16日に米原市教育委員会が主体となり、立命館大学と合同で、遺跡の範囲確認や土器棺以外の遺構検出を目的とした第１回発掘調査を実施した[(8)]。その結果、縄文晩期の墓１基と貯蔵穴２基を確認した。

2012年８月９日～31日に第２回発掘調査を実施した[(9)]。その結果、堅果類を多く含む土坑１基と少量含む土坑１基を確認した。また、突帯文土器期の墓もしくは儀礼用の土坑と推定する土坑２基を確認した。

2011・2012年度では墓以外の貯蔵穴等の遺構の存在を確認したが、住居跡の検出にはいたらなかった。その他の調査成果は次の通りである[(10)]。

縄文晩期の植物遺体として、クルミ、クリ、コナラ属、トチノキなどの堅果類を確認した。また、縄文晩期土器の胎土には花崗岩起原の砂粒が多く含まれており、このような砂粒が採取できる地点は約10km離れた姉川上流と推定できた。さらに、縄文晩期後半直前（おそらく縄文晩期前半）に堆積した土砂は前後２回にわたって異なる方向から堆積したものであることが礫の産状調査から判明した[(11)]。

2017年度の調査の目的と経緯　2017年度の調査では、2011・2012年度調査地の南東に「調査地１」、これまで発掘調査が行われていない遺跡西部に「調査地２」を設定した。これは住居、墓、貯蔵穴などの遺構の確認を地点を変えて実施するためである。これまでにも小学生の体験発掘などを実施し、遺跡の価値を地域に浸透させる試みを実施してきたが、2017年度も同様の試みを実施するとともに、発掘調査と同時併行で遺物の出土位置を再現する展示を美術家と共同で実施した[(12)]。

（矢野健一・小川香菜恵）

註

(1) 中川泉三1924「伊吹山下の石器」『考古学雑誌』14-13
(2) 島田貞彦1928『有史以前の近江』（『滋賀県史蹟調査報告』１）
(3) 小林行雄・藤岡謙二郎・中村春壽1938「近江坂田郡春照村杉沢遺蹟―縄文式土器合口甕棺発掘報告」『考古学』9-5
(4) 伊吹町教育委員会1988『杉沢遺跡発掘調査概要報告書』（『伊吹町文化財調査報告書』２）
(5) 伊吹町教育委員会1992『伊吹町内遺跡発掘調査Ⅰ　高番遺跡　杉沢遺跡』（『伊吹町文化財調査報告書』４）
(6) 伊吹町教育委員会1996『杉沢遺跡甕棺墓の調査　谷海道遺跡―伊吹町内遺跡発掘調査Ⅲ』（『伊吹町文化財調査報告書』10）
(7) 米原市教育委員会2006『杉沢遺跡発掘調査報告書―縄文時代晩期甕棺墓の調査』（『米原市埋蔵文化財調査報告書』２）
(8) 立命館大学文学部2012『杉沢遺跡　2011年度発掘調査概報』（『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』14）
(9) 立命館大学文学部2013『杉沢遺跡　2012年度発掘調査概報』（『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』15）
(10) 立命館大学文学部2015『滋賀県米原市杉沢遺跡発掘調査報告―2011・2012年度の調査―』（『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』18）
(11) 上峯篤史・松崎健太・鈴木啓介・矢野健一2013「滋賀県米原市杉沢遺跡における砂礫供給源の推定」『一般社団法人日本考古学協会第79回（2013年度）総会・研究発表会発表要旨集』
(12) 矢野健一・横谷奈歩・北原和規・藤井良平・松尾恵・高橋順之2018「滋賀県米原市杉沢遺跡における考古学と美術の共同プロジェクト」『一般社団法人日本考古学協会第84会（2018年度）総会・研究発表会要旨集』

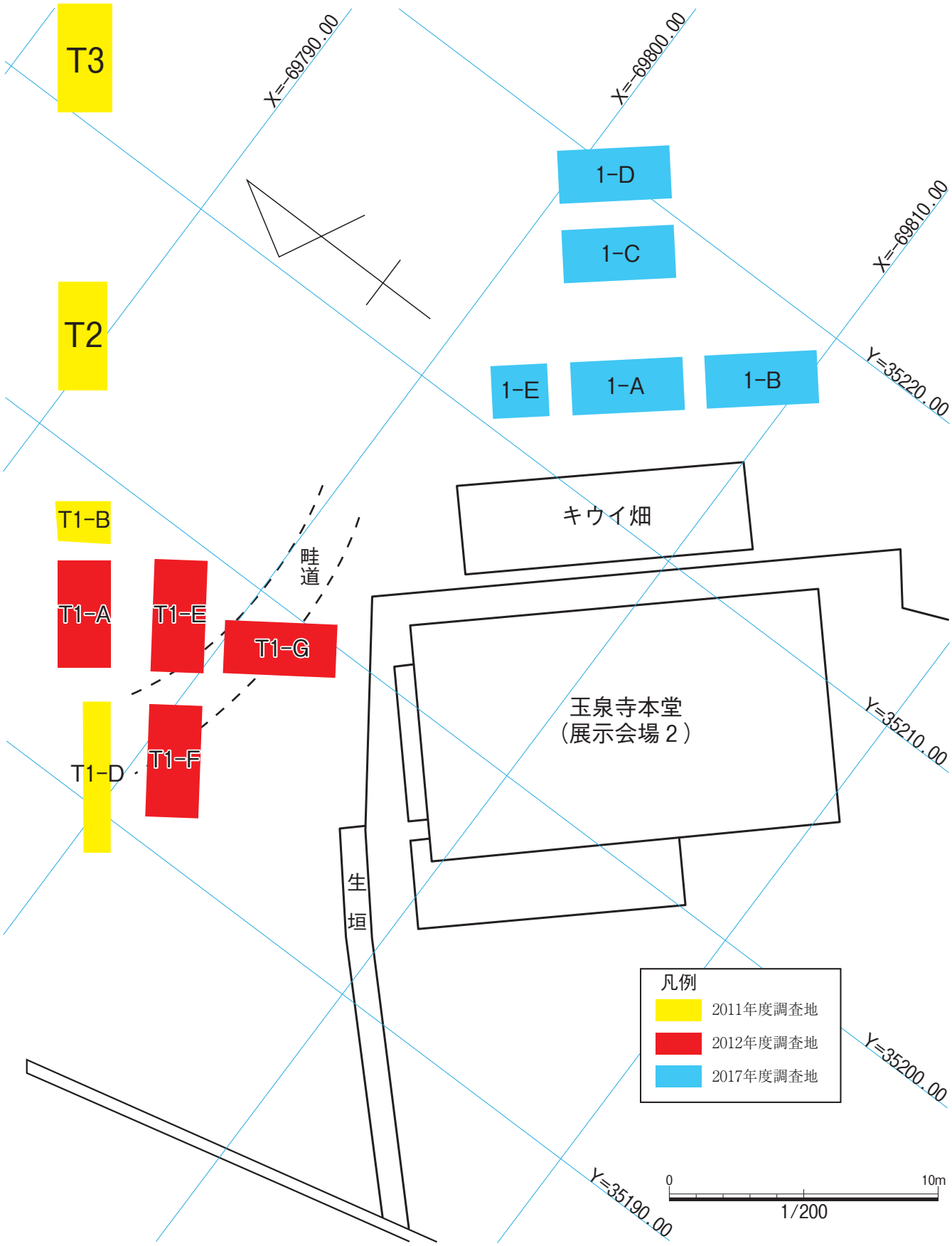


図２　調査地１トレンチ配置図

Ⅱ　各調査区の調査成果

（1）概　　要

本調査区は、伊吹山南麓弥高川の扇状地の末端に位置し（図４）、東側から西側にかけてなだらかに傾斜している。調査地１にＡ～Ｅの４つのトレンチを設定し、調査地２に１つのトレンチを設定した。１-Ａ～Ｄは２×４ｍ、１-Ｅは２×２ｍ、２は２×４ｍである（図２・３）。

１-Ａ区（図５）では、土坑３基と柱穴２基を検出した。主な出土物は陶磁器片と土師器片で、縄文土器片が少量出土した。

１-Ｂ区はＡ区の南東に設定した。土坑４基と柱穴６基を検出した。主な出土遺物は陶磁器片と土師器片で、縄文土器が少量出土した。土師器片で時代がわかるものは15世紀末か16世紀初めの頃のものである。

１-Ｃ・Ｄ区は小学生による体験発掘用にＡ区の北東に１ｍずつ間隔を空けた場所に設定した。表土を数cm掘削しただけでその下部は調査していない。陶磁器片が出土したほか、少量の縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土した。

１-Ｅ区はＡ区の北西に設置した。標高がＡ区よりもごくわずか高くなる。土坑２基と柱穴６基を検出した。他のトレンチと同様に陶磁器片と土師器片が主であるが、縄文土器片も少量出土した。

以上、いずれの地点でも縄文土器片が少量出土したが、縄文時代の遺構と確実に判断できるものは検出できなかった。縄文土器はいずれも無文の小片である。胎土もこれまでの調査で出土したものと類似しており、縄文晩期のものである可能性が高い。

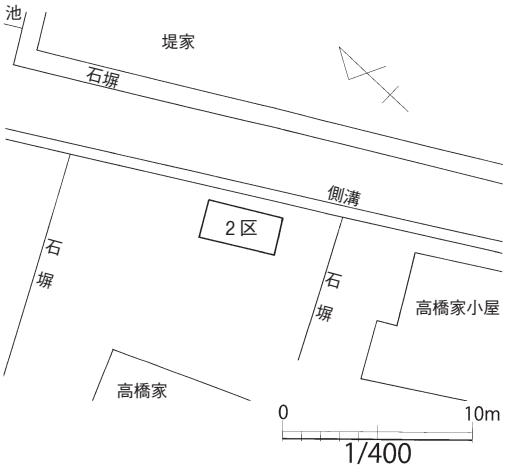


図３　調査地２トレンチ配置図

図４　調査地１から伊吹山を望む（南から）

図５　１-Ａ区調査前（南東から）

１-Ｂ区と１-Ｅ区では、地層に含まれる礫の産状分析を2012年度と同様の方法で実施し、2012年度と矛盾しない結果を得た。

調査地２は調査地１から西に100ｍ離れた場所に設定した。勝居神社の南側に位置する（図３）。性格不明の遺構を検出した。主な出土遺物は陶磁器片や土師器片で、時代がわかるものは15世紀末か16世紀初めの頃のものである。１-Ａ区と２区では、遺物の出土が確認出来なくなった後、重機で深掘りし、土層の確認を行った。１-Ａ区では土層中の花粉分析を試みたが、花粉の検出には至らなかった。

発掘調査と併行して、遺物の出土位置と深さを空間に再現して展示する試みを杉沢区集会所（展示会場１）で実施した。展示した遺物は１-Ａ区から回収したすべての遺物である。１-Ａ区の発掘に先立って、地表面で美術家の横谷奈歩が自作模型を設置し、その模型の写真を撮影する美術活動を行ったが、その横谷作成の自作模型も設置した位置と高さを記録してとりあげ、１-Ａ区の地表面での位置を再現して出土遺物と同じ空間に展示した。

（藤原亮太・鈴木大輔・矢野）

（2） 1－A区（図６～８）

第１層は現代遺物を多く含む表土層と暗褐色を呈する礫混砂質土層、第2a層は中世や近世の陶磁器片、土師器片が多く出土する褐色を呈する粘質砂質土層である。東北壁で確認した第３層は遺物をほとんど含有しない明黄褐色砂/シルト層で土師器小片１点が出土した。第１層から第2a層までは拳ほどの礫が非常に多く含まれており、中には頭ほどの礫も見られた（図６・７）。

遺構は第１層下部から第2a層にかけて柱穴と土坑、加えてトレンチ東側で礫群が検出された。SK1は直径約60cmの土坑。SK1内SP1は直径約20cm、深さ約25cmであり、土師器のほか炭化物が出土している。中世の柱穴であると考えられる。SK2は直径約80cmの土坑であり、トレンチ中央で検出したが、遺構輪郭の確定が困難で、トレンチ断面で確認したところ、深さ20cm程度の遺構であることが判明した。遺構の底面付近には炭化物がまとまって見られた。SK1から北西に１ｍほど離れたところにSK3が存在する。直径約30cm、深さ22cmの土坑である。

第2b層にはいると遺物がほとんど出土しなくなったので、北西側半分を重機でさらに１ｍ程度掘削したが、遺物包含層を検出することはできなかった。第2b層最下部で東西方向の流路を検出し、自然流路と判断した。

Ａ区では出土位置の三次元座標を記録して取り上げた後、遺物のほぼすべての出土位置を再現して展示会場１に展示した。

出土遺物（図８）トレンチ全体で陶器片50点、磁器片24点、土師器片37点、縄文土器片４点、レンガ２点、タイル１点が出土した。

第1a層からは陶器片29点、磁器片17点、土師器片２点、レンガ１点、タイル１点が出土した。陶器片には擂鉢２点が含まれ、底部に糸切痕が見られるものもある。また、上絵付けが施される磁器もあり、九谷焼と思われる。

第1b層からは陶器片15点、磁器片６点、土師器片26点、縄文土器片３点、レンガ１点が出土した。15世紀末から16世紀初頭の土師器が出土している（図８）。また、縄文土器片は縄文晩期と推定できる。

SK1からは縄文土器１点、陶器片１点、土師器片５点が出土。SK1内SP1からは土師器片が１点出土するのみであった。

第２層から遺物が極端に少なくなり、第2a層からは陶器片１点、土師器片２点、第2b層最上部から陶器片１点、第３層からは土師器小片１点のみである。

（鈴木・吉田里水）

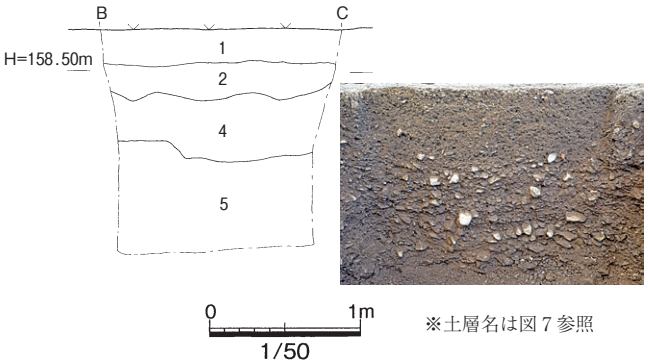


図６　1－A区層位図と北西壁面（南東から）

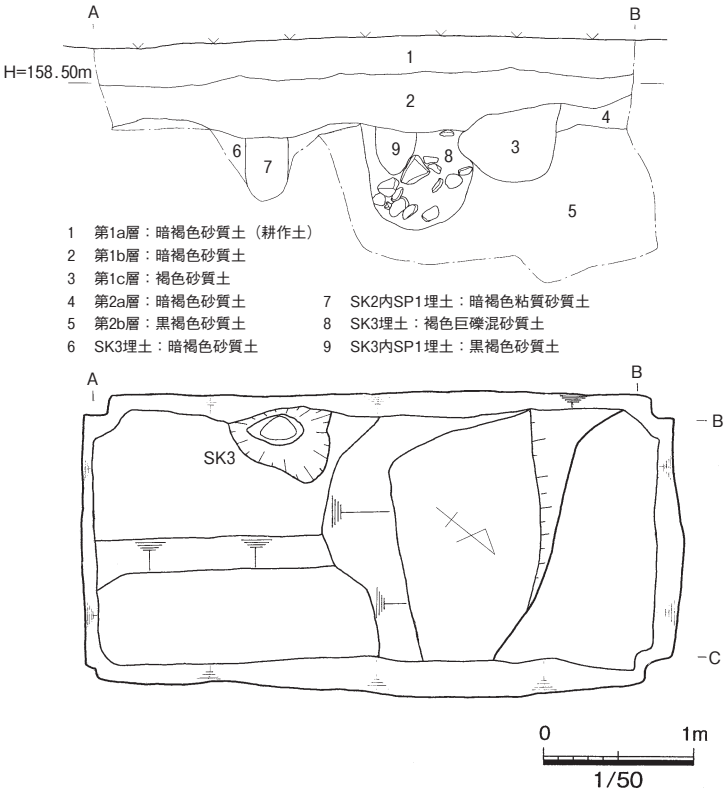


図７　1－A区完掘後平面図・層位図（北東から）

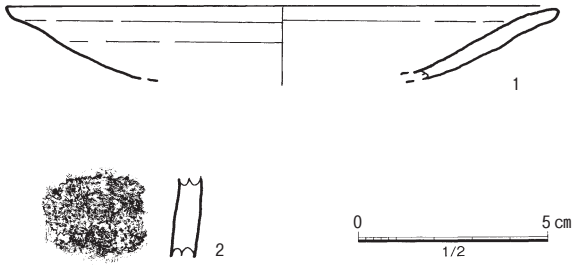


図８　1－A区第1b層出土遺物

（3） 1－B区（図９～11）

本調査区は１－Ａ区の南東側に位置する。

第1a層は耕作土で、現地表面から約30cmの深さである。陶磁器片ほか、ガラス片、プラスチック片などの近現代遺物が多数出土している。第1b層（暗褐色砂質土層）は第1a層と同質の土であるが、第1a層と比べ締まりが強く、２～３cmの礫を少量含む。出土遺物は、陶磁器片、土師器片、縄文土器と思われる土器片１点ほか近現代遺物である。

第2a層（褐色砂質土礫混層）上面では、SK1～4の土坑４基、SP1・2の柱穴２基を検出した。第2a層は第1b層と同じく締まりが強く10cm大の礫を多量に含む。一部20cm大の礫や１cm大の小石を含む。第2a層上面において、陶磁器片、土師器片、縄文土器片が出土している。

SK1は径約35cm、深さ約20cmの円形を呈する土坑で、埋土からは土師器片と縄文土器片が出土した。SK2は長径約35cm、短径約25cm、深さ約20cmの楕円形を呈し、裏込め石と思われる石の積み重なりがみられる。埋土からは土師器片が出土した。SK3は長径約57cm、短径約35cm、深さ約50cmの楕円形を呈する土坑で、埋土からは土師器片が出土した。SK4は径約40cm、深さ約60cmの円形を呈する土坑で、埋土からは土師器片が出土した。

SP1は径約15cmの円形ピットで遺物は検出されなかった。SP2は径約30cmの円形ピットで、埋土からは土師器片、陶磁器、縄文土器片が出土した。

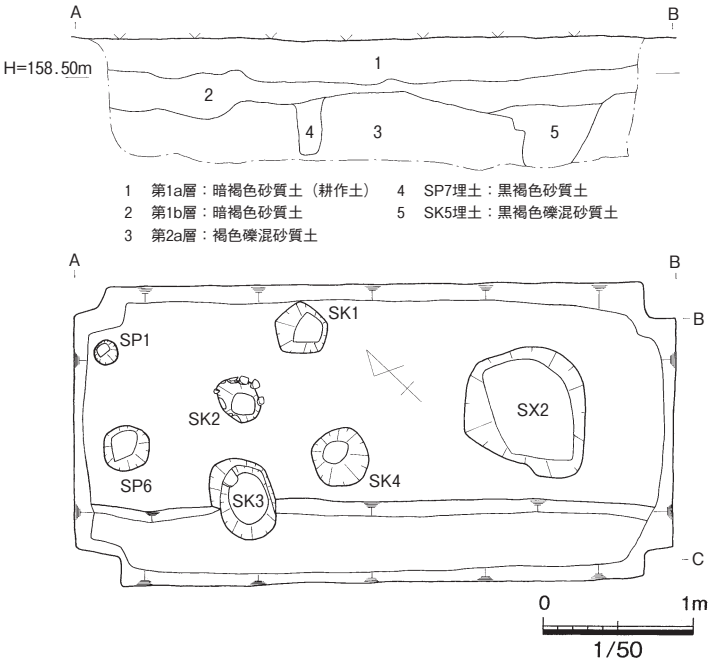


図９　１－Ｂ区調査終了時平面図・土層図

いずれの土坑、柱穴も２～３cm大の礫を多量に含む。

出土遺物（図11）　第1a層からは陶磁器片156点ほか、ガラス片、プラスチック片などの現代遺物が多数出土している。第1b層からは、陶磁器片41点、土師器片３点、縄文土器と思われる土器片１点ほか現代遺物も出土している。第2a層上面では陶磁器片５点、土師器片20点、縄文土器片３点が出土している。SK1埋土からは土師器片２点、縄文土器片１点が出土した。SK2埋土からは土師器片３点が出土している。SK3埋土からは土師器片13点が出土している。SK４埋土からは土師器片８点が出土している。SP2埋土からは土師器片20点、陶磁器片５点、縄文土器片３点が出土している。

１は表採の須恵器甕の小片。２はSK2埋土において検出した土師器皿の小片である。奈良～平安時代か。縄文土器は細片かつ無文であるので詳細な時期の確定は難しいが、縄文晩期の可能性が高い。

（進藤郁美・矢野）

図10　１－Ｂ区調査終了時状況（南東から）

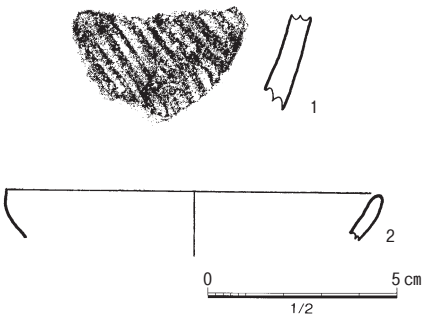


図11　１－Ｂ区出土遺物

（4） 1－E区（図12～15）

A区の北西側に位置する本調査区はA区よりも標高が高いことから、縄文時代の遺構が地表面に近い可能性があるため、A区調査途中に2×2mで設定した。

第1a層は暗褐色を呈する耕作土。4cm前後の礫を少量含む。土師器片1点、陶器片14点、磁器片15点、ガラス片3点、タイル2点と釘が出土した。印判手がみられることから、磁器は明治時代以降のものがほとんどである。第1b層は直径9cm前後の礫が多く混入する暗褐色の砂質土層で、第1a層より締まる。また、出土した遺物は第1a層と類似する。土師器片2点、陶器片6点、磁器片10点、釘1点、タイル1点が出土した。近世後半と思われる磁器、及び陶器には擂鉢が含まれる。

第2a層は鉄分を多く含んだ黄褐色の砂質土層で、第1層より締まる。礫は少なく、粘性が強い。北東壁面は斑状に黒褐色土が混入する。第2a層上面で黒色部を検出し、それぞれSK1・2及びSP2～6を遺構と判断した。トレンチ南東部には拳大の礫が集中する。壁面から縄文土器片2点、土師器片1点が出土している。第2b層は直径12cm前後の礫と細かい砂粒を多く含む黒褐色の砂質土層。第2b層上部は黒褐色だが、下部は第2a層と類似する黄褐色を呈する。おそらく、近接する樹木の根の腐食が関係していると考えられる。そのためか、第2a層より脆い。

SK1は直径約65cm、深さ約25cmの浅い土坑状の遺構。礫を多く含む褐色の粘質砂質埋土は、中央でやや盛り上がることが断面から確認できた。遺構の北部は調査区トレンチの壁面に接しており、未調査である。出土遺物は埋土に混在する縄文土器小片、土師器小片以外には確認できないため、遺構の性格は確定できない。SK1内SP1は直径約25cm、深さ約40cmの土坑状遺構。第2b層直上まで掘り込んでいる。黒褐色の砂質埋土は礫を多く含む。遺構の北西部はトレンチの壁面に接しており、未調査である。SK1同様、出土遺物は埋土に混在する縄文土器小片、土師器小片以外には確認できないため、遺構の性格は確定できない。縄文土器は無文で時期は特定できないが、縄文晩期の可能性が高い。縄文土器片（図15）8点、土師器片2点が出土。

SK2は直径約70cm、深さ約32cmの浅い土坑状の遺構。褐色の粘質砂質埋土は礫を多く含む。遺構の東部はトレンチ壁面に接しており、こちらは未調査である。SP2は直径約23cmの浅い円形ピット。シルトではないが粘り気のある砂質埋土は黒褐色を呈する。SP3は直径約24cmの浅い円形ピット。シルトではないが粘り気のある砂質埋土は褐灰色を呈する。SP4は直径約23cmの浅い円形ピット。粘質砂質埋土は褐灰色を呈す。SP5は直径約18cmの浅い円形ピット。砂質埋土は黒褐色を呈す。SP6は直径約21cmの浅い円形ピット。粘質砂質埋土は褐灰色を呈す。いずれの遺構も遺物は出土していないが、埋土の特徴からSP3・4・6の3基、SP2・5の2基がそれぞれ同時期と考えられる。（鈴木）

図12　1－E区遺構検出状況（北東から）

図13　1－E区北西壁面（南東から）

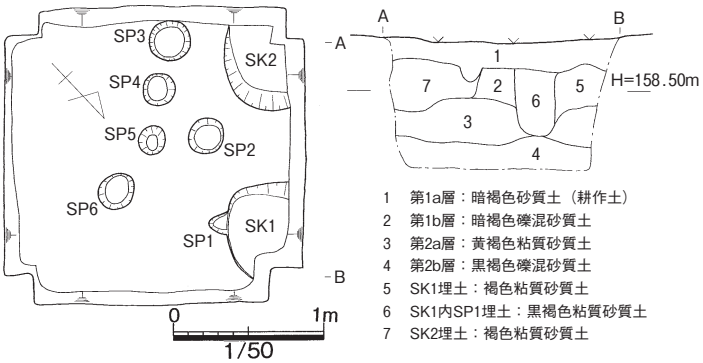


図14　1－E区遺構平面図・完掘後層位図

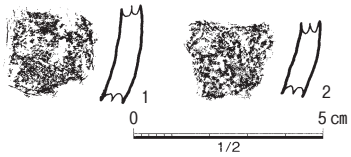


図15　1－E区SK1内SP1出土遺物

（5） 2区（図16～18）

本調査区は調査地１から西に100mの距離にあり、勝居神社南に位置する。

第１層は暗褐色を呈する耕作土である。第１層からは釘などの現代遺物とともに土師器片や陶磁器片など約66点の遺物が出土した。

第2a層は全体に20～30cmほどの大型礫と細かいシルト層を含む褐灰色の混じる礫混黄褐色粘質シルト層である。第2a層上面ではSD1・2、SP1、SP8、SK2・SX1～4の遺構９基を検出した。SD1・2は現代の耕作溝。SD1は幅約30cm、深さ約20cmでSP8を切っている。土師器片２点、陶磁器片４点のほか、現代遺物が出土した。SD2は幅約35cm、深さ約20cmでトレンチ西角のSK2を切っている。SK2は深さ約18cmの土坑である。遺構はトレンチの壁面に接している。SK2埋土からは、陶磁器片１点、土師器片7点が出土している。SX3は短径約１m、長径約２mの楕円形に近い形の遺構である。最も深いところで18cm程度の深さをもつ。長軸８～13cmの礫が多数混入しており、陶磁器片と土師器片が合わせて22点出土した。第2a層下部から遺物が非常に少なくなるので、第2b層以下は深く地層を観察するために重機で掘削した。

第2b層は、拳大ほどの中形礫と粗めの砂粒からなる黄褐色砂層である。第2c層は大形礫と粗い砂粒からなる暗黄褐色砂層である。第2d層は、５cm以下の小形の礫と細かい砂を含む暗黄褐色砂層である。第2b層から第2d層からは遺物は検出していない（図17）。

出土遺物（図18） 本調査区では16世紀前後の土師器から、現代までの遺物が出土した。このうち、主要な遺物を報告する。

１は表採した花崗岩製の凹石である。時期は不明だが、縄文時代の可能性もある。２面に敲打痕があり、他の1面は摩耗した敲打痕か、もしくは人為的な摩耗痕とみてよいものが観察できる。どの面も自然な摩耗が見られるので、近現代の使用で生じた敲打痕とは考えにくい。

２・３はいずれも15世紀末から16世紀初頭の土師皿の口縁部破片である。ともにSK2埋土から出土した。２は口径約８cmの小型の土師器皿で、３は中型の土師器皿である。ともに１-Ａ区出土の土師器（図８の１）と同時期のものである。

４は底部径15cmの陶磁器底部片である。SX3埋土から出土した。内外面に回転ナデ調整が施されている。近世以降のものである。 （西山集・矢野）

図16　２区SX3検出状況（南西から）

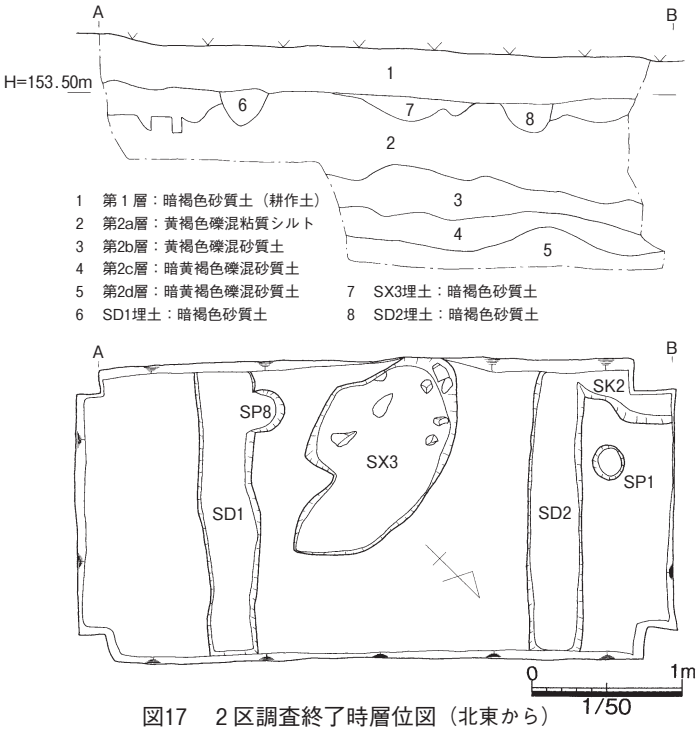


図17　２区調査終了時層位図（北東から）

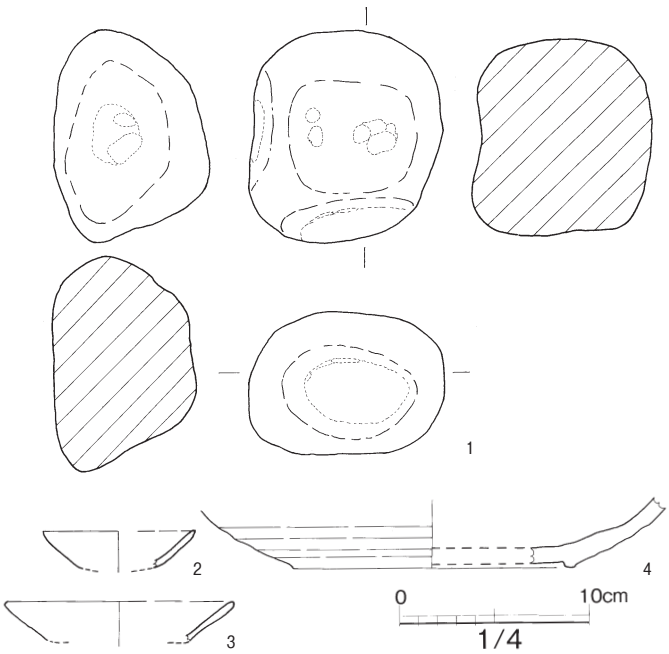


図18　２区出土遺物

Ⅲ　杉沢遺跡における礫配列と礫種

本年度の調査では１-Ｂ・Ｅ区と２区にて各トレンチの包含層第２層から礫サンプルを20点抽出し、クリノメーターを用いてそれぞれの走向・傾斜角度を測定した。測定後、礫を無作為に取り上げ、肉眼による産状調査を実施した。なお、１-Ｂ区と２区に関しては、第２層中部での抽出の際に走向・傾斜角度や礫種が第２層上面と同様に、傾向を示さなかったため第２層下部以下は調査しなかった。

調査区全体として、走向は１-Ｂ・Ｅ区第２層上部、Ｅ区第２層中部・下部でそれぞれ同様の傾向を示し、傾斜は１-Ｂ区第２層上部と２区第２層上部で同様の傾向を示す。礫種は堆積岩、主に砂岩で構成される。いずれも風化が著しい。以下、各トレンチの概要を述べる（図19）。

１-Ｂ区第２層上部は走向N15～35°Ｗ、傾斜N15～45°Ｗに集中する。礫種は砂岩85％泥岩15％で構成される。１-Ｅ区第２層上部は走向N25～65°Ｗ、傾斜N25～45°Ｅに集中する。礫種は砂岩85％泥岩10％泥質ホルンフェルス５％で構成される。同区第２層中部は走向N15～35°Ｅ、傾斜N45～75°Ｗに集中する。礫種は砂岩95％泥岩５％で構成される。同区第２層下部は走向N15～35°Ｅ、傾斜N25～35°Ｅ、N15～35°Ｗに集中する。礫種は砂岩92％泥岩８％で構成される。２区第２層上部は走向N15～35°Ｅ、傾斜N5～35°Ｗに集中する。礫種は砂岩のみで構成される。前述したように、１-Ｂ区と１-Ｅ区の第２層上部の走向は概ね一致するといえるが、傾斜角度は異なる。

一方、１-Ｂ区と２区の第２層上部の傾斜は概ね一致している。しかし、１-Ｂ・Ｅ区第２層上部と１-Ｅ区第２層中・下部の走向は真逆である。１-Ｅ区第２層中・下部と２区第２層上部の走向が一致している点は、両者の距離が離れており、堆積時期も異なる可能性があるため、偶然の一致である可能性が高い。また、今回の調査内では覆瓦状構造（インブリケーション）といえるほど明瞭な結果を得られなかった。

2012年度の調査の際にはＴ１-Ａ・Ｅ区⑥（Ⅲ層上部）において、両区の走向・傾斜角度の一致から覆瓦状構造を確認した（上峯ほか2013）。今回得られたデータと合せて考えると、１-Ｂ・Ｅ区第２層上部とＴ１-Ａ・Ｅ区⑥（Ⅲ層上部）、１-Ｅ区第２層中・下部とＴ１-Ｅ区⑦（Ⅲ層下部）がそれぞれ概ね一致する傾向を示している。しかし、この一致は偶然の一致である。Ｔ１-Ａ・Ｅ区と１-Ｅ区は約10mしか離れていないが、Ｔ１-Ａ・Ｅ区第３層が縄文時代（晩期前半？）の堆積であるのに対し、１-Ｂ・Ｅ区第２層は包含する遺物から中世末期の堆積と推定できる。走向と傾斜が、それぞれ２つの方向や角度に収束する傾向があることに意味があるとすれば、扇状地末端という傾斜する地形が基本的に大きく変わらないことや、この地形に制約を受けて方向が決まる小河川の流路が通時的に同じような方向に流れることが関係しているのであろう。

礫種について、伊吹山西側斜面は石灰岩が広く分布するが、いずれの地点でも石灰岩は確認されなかった。姉川流域に多い花崗岩も確認されなかった。杉沢遺跡周辺では花崗岩は少なく堆積岩が多い傾向にあり、本地点もその傾向と一致する。　　（鈴木・矢野）

参考文献

上峯篤史・松崎健太・鈴木啓介・矢野健一2013「滋賀県米原市杉沢遺跡における砂礫供給源の推定」『一般社団法人日本考古学協会第79回（2013年度）総会・研究発表会発表要旨集』日本考古学協会

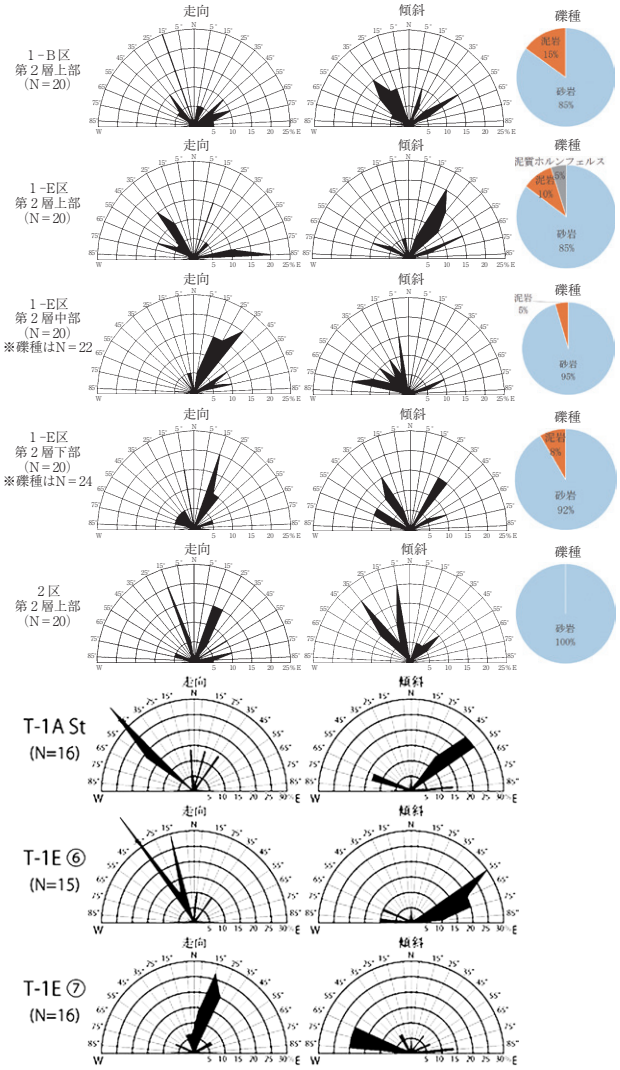


図19　走向・傾斜角度分布（下３つは2012年度調査分）

Ⅳ　花粉分析

（1）試　　料

試料は1－A区の第2b層の礫の少ない場所を選び、9ヶ所で採取した（図20・21）。

（2）分析方法

分析には、アセトリシス法を用いた。

①アルカリ処理

試料約3gを遠沈管にいれ、10%の水酸化カリウム水溶液25mlを加える。そして、遠沈管を90℃のお湯で10分間湯煎する。その後、遠沈管を氷水で冷却し、4分間遠心分離機（2000回転/分）にかける。4分後、上澄みの液を捨て、蒸留水を約5cm加え、遠心分離機にかける。

②大型夾雑物の除去

180μmメッシュの篩をビーカーにかぶせ、蒸留水を用いつつ、アルカリ処理後の試料を篩にかける。ビーカー内の試料をかき混ぜ、10秒間傾ける。沈んだ内容物がまざらないよう注意し、遠沈管にいれる（図22）。

③アセトリシス処理

遠沈管に少量の水が残るため、無水酢酸を15cc加え遠心分離機にかけ、分離した後、無水酢酸を捨てる。無水酢酸：濃硫酸＝9：1の割合で、アセトリシス溶液を作る。分離後の試料に、アセトリシス溶液を25ml加え攪拌する。90℃のお湯で3分間湯煎し、さらに4分間遠心分離機にかける。アセトリシス溶液を捨て、無水酢酸を15cc加え、再度4分間遠心分離機にかける。無水酢酸を捨て蒸留水で水洗後、蒸留水を加え4分間遠心分離機にかける。水洗・遠心分離機にかける工程を3回繰り返し、分離を行う。

≪花粉化石のプレパラートの作り方≫

まず、水分が蒸発し花粉が壊れないようにするため、採取した試料の入った遠沈管にグリセリン3mlを入れる。試料を一適程度スライドガラスに落とし、グリセリンを適量加え、爪楊枝で混ぜる。気泡が入らないように注意しながらカバーガラスをかける。

（3）結　　果

全試料から花粉化石は産出されなかった。要因として、採取地点がほとんど花粉化石のたまりにくい礫層であったためと考えられる。

今回の調査からは結果は得られなかったが、今後も調査を続けていきたい。

（滋賀県立米原高校地学部・北村天音）

図20　試料4～7を採集した地点

図21　試料4・8・9を採集した地点

図22　篩を使い大型夾雑物の除去をする

Ⅴ　小学生発掘体験

今年度の発掘調査において、小学生を対象とした発掘体験を実施した。8月18日には放課後児童クラブ「いぶきっこクラブ」の4年生17人が参加した。また、8月23・24日には米原市子ども発掘体験教室を実施し、2日間で計17人の米原市内の小学生が参加した。体験内容は、発掘作業の体験（図23）、遺跡の説明と発掘現場の見学（図24）、集会所の展示見学であった。

発掘体験は、１-Ａ区の北東側に設定した１-Ｃ・Ｄ区で学生の指導のもと行った。地表面を数cmの深さで移植ごてと手ガリで発掘した。しゃがみながらの作業には戸惑った様子も見られたが、多くの陶磁器片の他に、縄文土器片３点、土師器片３点、須恵器の口縁部片１点（図25）が出土した。７世紀末から８世紀初めの須恵器杯蓋だろう。Ｄ区ではそれら今回の発掘体験を通じて、身近な遺跡の重要性とモノを掘り起こすことで過去を明らかにする考古学の醍醐味が少しでも伝わったのではないだろうか。この体験を通して考古学との距離が近くなってくれていたら幸いである。　　（吉川真矢・矢野）

図23　１-Ｄ区での体験発掘

図24　調査地１発掘現場説明

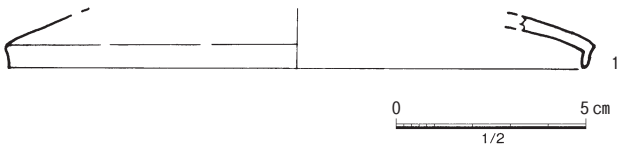


図25　１-Ｄ区出土遺物

Ⅵ　考古学と美術の共同展示プロジェクト

調査と併行して出土遺物の展示を現地で実施した。遺物の出土位置を展示空間に再現するとともに、発掘前に発掘区画直上の地表面で美術家が美術作品の創作活動を行い、その作品も出土遺物と同じ展示空間に展示した。この展示プロジェクト『芸術と考古学～time, timer, timest～夏休みの遺跡』（以下『夏休みの遺跡』と略称）は、２つの会場で行われた。杉沢区集会所の会場（展示会場１）では、現代と過去との一体性を展示するという目的をもって、地上の美術活動と地下の遺物とが一体化した作品を展示した。玉泉寺（展示会場２）では、遺跡で暮らす人々と遺跡の関係性に着目した映像と遺物を展示した。

美術作品の創作は美術家の横谷奈歩が担当し、展示に関わる美術デザインを北原和規・藤井良平（UMMM）、展示プロジェクトのコーディネートを松尾恵（ヴォイスギャラリー）が担当し、前田英一（ヴォイスギャラリー）と宗幸（UMMM）が協力した。写真家の牧野和馬が展示の写真撮影を担当した。

展示概要　今回行われた『夏休みの遺跡』（図26）のプロジェクト構想の発端は、2015年９月26・27日に京都市両足院で実施した『日曜日の遺跡』と題する展示にある。ここでは、2011・2012年に立命館大学が発掘した出土遺物の出土位置を再現する展示を行った。展示品は出土遺物のみであった。プロジェクトのコーディネートを美術家の安芸早穂子氏が担当し、展示デザインを北原と藤井が担当しており、美術的色彩の濃いものだった。

今回の『夏休みの遺跡』は調査地１の１-Ａ区の発掘作業の進行に合わせて、出土位置を記録して取り上げた出土遺物を水洗・注記・登録した後、展示空間に出土位置を再現して展示し、制作進行中の状態で展示作品を公開した。

また、１-Ａ区発掘前にその地表面で横谷が美術作品の製作活動を実施した。横谷は自作の家具などのミニチュア模型をジオラマのように設置し、その情景を写真撮影し、あたかも現実の情景であるかのように見える写真を美術作品として発表してきた。今回は、横谷が自作のミニチュア模型を発掘前の１-Ａ区地表面に設置し、その写真を撮影し、そのプリントを作品として展示会場に展示した。

さらに１-Ａ区地表面に設置した横谷の模型の位置と標高を記録して図面に記録して回収し、その位置を展示

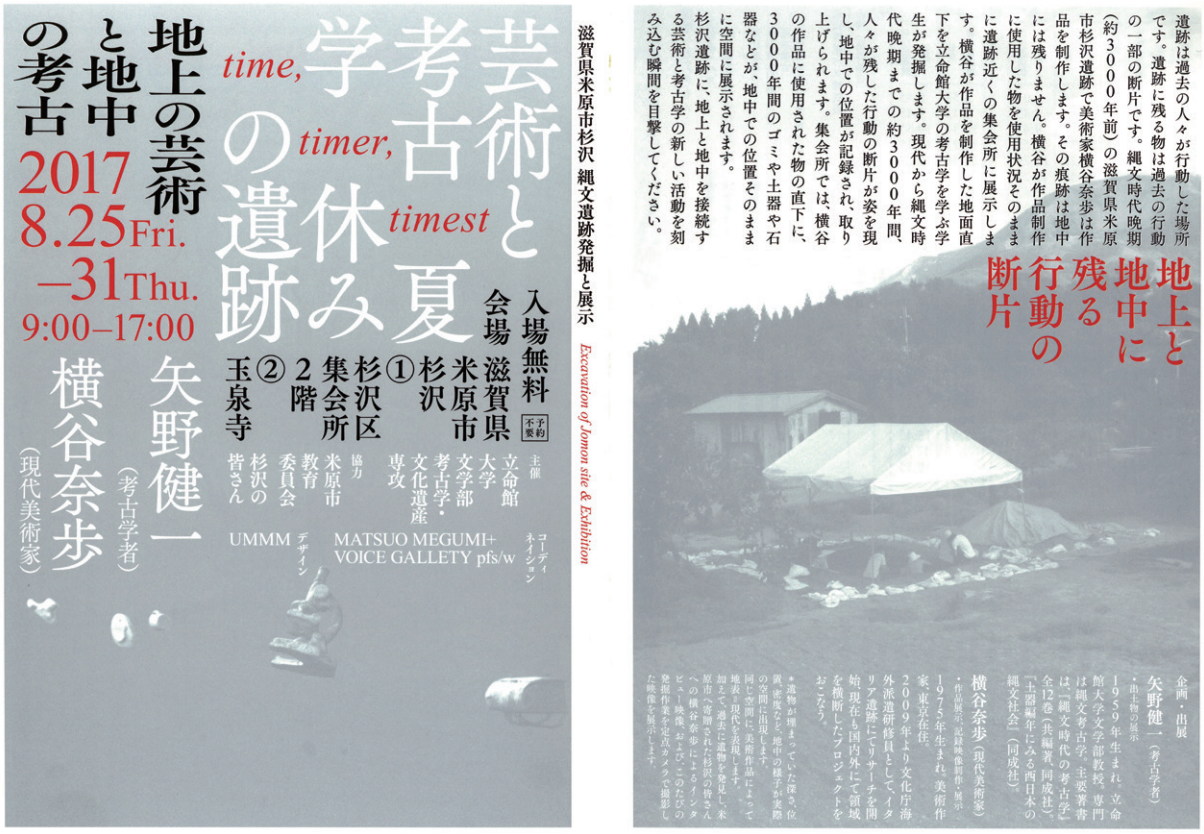


図26 『芸術と考古学～time, timer, timest～夏休みの遺跡』案内冊子表紙

空間に再現した。1－A区の地中から出土位置を記録して回収された遺物は、地面の高さを示す横谷の模型の直下に展示されることになる。このように、地上と地中の活動の痕跡としての「物」が一体化した状態を展示した（図28～33）。

展示制作と公開　2017年7月14日～16日に横谷が1－A区地表面に自作模型を設置し、写真撮影を実施した（図27）。学生と矢野が模型の位置を図面に記録した（図28）。

7月23日に杉沢区にお住まいの藤田家の藤田つる子氏、藤田光子氏、藤田博文氏に杉沢遺跡や遺物との関わりに関して、横谷がインタビューを行い、高橋順之（米原市教育委員会）と矢野が立ち会った。このインタビュー画像は横谷が編集して1－A区に接する玉泉寺で展示した（図34）。

8月6日から展示会場1の杉沢区集会所で展示の設営を行い、まず、横谷氏の模型作品を出土位置を再現して展示した。その後、8月13日から出土遺物の展示を開始し、当日、内覧会を開催した。その後、随時、現地を訪れる見学者には展示を公開した。8月25日～31日に現地発掘説明会を兼ねた展示の一般公開を実施した。

展示会場2の玉泉寺での展示は、インタビュー映像と地元住民が採集して米原市教育委員会に寄贈された出土遺物を展示した。展示会場2の公開は、8月25日～31日に限って実施した。

今回の展示は、発掘と同時進行で実施し、発掘現場近くの建物を使用するという点で、準備や展示環境という点で十分とは言えない点もあるが、発掘と展示を現地で同時に実施した効果は大きく、地元メディアの関心を呼んだ。

図27　1－A区での横谷の模型写真撮影

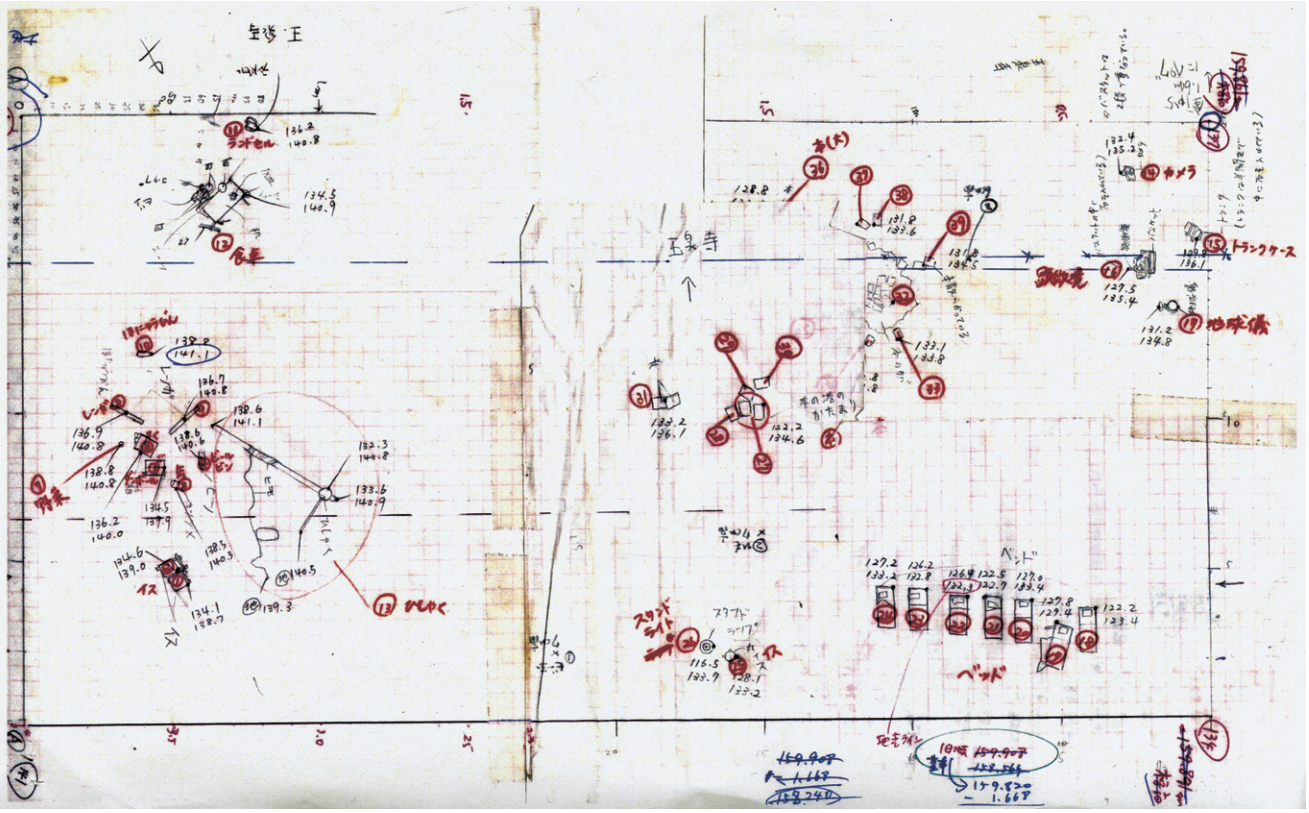


図28　横谷制作模型の１－Ａ区地表配置状況図（右下にベッド７個）

図29　横谷制作写真（SS_Aug.2017 ― Contemporary as the earth's surface. 2）

図30　杉沢区集会所展示風景（中央奥にベッド写真作品、手前にベッド模型つり下げ展示。写真：牧野和馬）

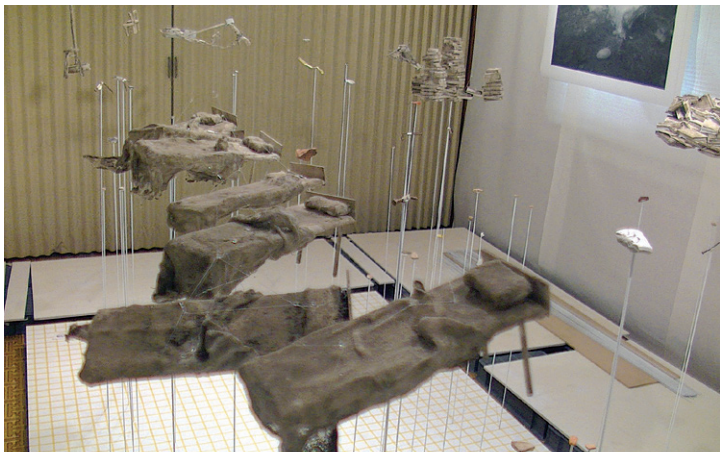


図31　ベッド模型つり下げ展示状況

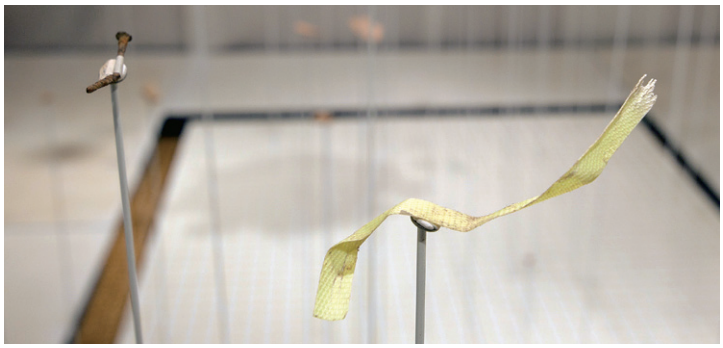


図32　遺物装着状況（写真・牧野和馬）

図33　遺物装着状況
（径３㎜の金属製中空管に練り消しゴムで遺物を装着した押しピンをはめ込んだ。　写真：牧野和馬）

図34　玉泉寺（展示会場２）展示風景（写真：牧野和馬）

玉泉寺インタビュー映像の素材となった藤田家へのインタビュー

【インタビュー対象者】
藤田つる子氏（故藤田和彦氏の妻）1933年生
藤田　光子氏（故藤田和彦氏の子）1958年生
藤田　博文氏（藤田光子氏の夫）1953年生

藤田つる子氏ご一家は杉沢遺跡のある米原市杉沢で暮らす。つる子氏の夫・和彦氏が遺跡に関心を抱き、遺物の収集も行っていた。1954（昭和29）年に藤田家自宅敷地から甕棺（杉沢遺跡第８号甕棺）が発掘され、1993（平成15）年にも第10・11号甕棺が発掘された（米原市教委2006）。藤田家に保管されていた遺物は縄文土器24点、土師器・須恵器等34点、磨石・石皿等石器５点などがある（矢野ほか2015）。

【インタビュアー】
横谷奈歩（美術家）

【同席者】
高橋順之（米原市教育委員会）
矢野健一（立命館大学）

【日　時】2017年７月23日17時－18時
【場　所】杉沢区集会所（滋賀県米原市）

横谷奈歩　よろしくお願いいたします。私は、美術をやっているのですけれども、杉沢遺跡の、遺物にどんな物語があるのだろう、どんなエピソードがあるんだろうとか、遺物を見つけられたときにどんな気持ちになったかとか、そのような小さいお話でもいろいろお伺いできたら、親しみが湧くし、身近なものとして考えられると思って今日お伺いしました。ここに見せていただいている出土品は、すべて藤田さんのお父様が見つけられたということですが、そのあたりのこと覚えていらっしゃいますか。

藤田光子（以下、光子）　農作業の時に見つけたのが大半です。でも、そういったものが出てくることはよくわかっていて、農作業をしながらそういったものがないか

と…。

藤田博文（以下、博文）　畑？　田んぼ？

光子　畑。

藤田つる子（以下、つる子）　田んぼは、おこしてるときにね。小さい破片を…。

光子　作業しているときに拾って、遺物の土を落としているのはよく見たことがあるのですけど…。

横谷　宝探しみたいですね。

つる子　そう。畑作業してるのか、宝探ししているのか半々で（笑）。

光子　若い時に、甕棺ひとつ見つけていたと思うんです（1954年に発見された第８号甕棺）。

つる子　今の家の前の時に芋床をする前に、芋を掘った時に一つ出てきたんだったね。

博文　それってどの辺だっけ？

つる子　家の前。

博文　今の家あたりからは？

光子　庭先から…。

つる子　庭先かな？

博文　これ（1993年に発見された第10号甕棺）はすぐ近く？

つる子　ううん。違う違う。あれはずっと昔の…。

博文　７、８ｍ離れたところだね。もっと離れてる？

つる子　これは離れてる。あのときのはどうでした？

高橋順之　あれは燃えたんですよ。

つる子　そう。全部火事で燃えて…。

光子　全部燃えてしまって、どっか行ってしまったのをすごく残念がってました。いつまででも言ってました。伊吹山３合目の伊吹山観光ホテルに展示してたけども火事になって、それで無いということはいつもいつも言ってました。

横谷　火事があったんですね。

博文　ホテルに展示室があったんですよ。

高橋　杉沢の石器とかといっしょに、その土器も並んでいたんですけど…。見つかったのが昭和29（1954）年で、燃えたのが昭和37（1962）年やった。

横谷　そうですか。その甕棺をご覧になったのを覚えてらっしゃいますか？

つる子　…。

横谷　でも、御主人はすごく残念がっていらしたんですね。

つる子　それだけでなくて、他のもあります？

高橋　他は、石器類などは、明らかに火を受けた形で伊吹山文化資料館に何点かはあります。

つる子　辻村さんとこの畑から出たのは甕棺じゃないですか？

高橋　辻村さんとこの畑では、小さい甕棺だけですね。西堀さんとこは出てますね。

つる子　西堀さんのは…。

高橋　伊吹山文化資料館にあります。

つる子　ああそうか。西堀さんのとこは、整ったものですね。

博文　多分、最初掘り出したのは上っ側やね。当たり前やね。子供がまだ小学校に上がったころに、自然薯を食べよう思うてね…。

光子　梅の木の根元に、その自然薯の蔓があって、それを掘ってたら、ごつんとぶつかって…、見つかって、ばんとみてわかったんですけど…。

博文　いやわかんないよ。俺はわかんない。

光子　いやまあ、そうゆうもんやけど。まあ、今掘るのもなんやし、とりあえず、ほっとこって…。上から土を戻して、何年も置いといたのです。そしたら子供が、あれいつ掘るの？　僕が見つけたのに…。

博文　でもその時点ではね、上の部分だけしか見えてなくて、わかるわけないでしょ。

光子　でも、父は分かった。

高橋　甕棺やって…。

光子　そう。甕棺やって言うんで。息子も、僕の掘ったあれ、いつ掘るのいつ掘るのって…。まあ、そのうちそのうちって…。

博文　自然薯は確か30㎝ぐらいのいいのが採れたんです（一同笑う）。

博文　そこで終わっとったんですよ。幸いなことに。（自然薯が）終わっていなかったら割れてましたよ。

光子　（甕棺の）つるんとした表面が上に見えたんですよ。

つる子　そのままになっとんたんですけど…。それから後に、そこに建物を建てようかということで、やっぱり気になりまして…。その時やね、（土を）おこしてもらったの。

高橋　はい。

つる子　あれがなかったら、まだそのまんま。

高橋　そうやね。出てきてないもんね。

横谷　藤田さんのお父様は、一回火事で（甕棺を）燃やされてしまって、すごい残念な甕棺だっておっしゃられたんですよね。だから、掘りたいって気持ちはあったんですね。

つる子　そうだと思います。
博文　でも、パッと見て甕棺だとわかる？
高橋　いや、ゆうてはりましたもん、たしかに。甕棺に違いないって。だからいつか掘ってねっていう話は、聞いてて…。たまたま建物の話があがってね。
横谷　いつかは掘ってねっていう…。あれは甕棺なんじゃないか、いつかは掘ってねっていう話になる…。っていうことは、その身近なお庭にあっても掘るのってめんどくさいものですか？
つる子　そうですね。やっぱり…。
博文　息子が気にしてましたね。
光子　でも、ほかの仕事も忙しくて、そのままでいいかなって、かまってられなかったんですけど。
高橋　基本はやっぱり市や町の単位でやるんやけど…。
光子　市にお願いしないといけないって言っておりました。
つる子　木の根っこがありましたね。
光子　ああ、ちゃんと測ってもらわないといけないですもんね。
横谷　では、燃えてしまってから、また掘り出すのって、結構時間があいていたんですね。
つる子　そうです。はい。
横谷　何十年か後だったんですねえ。
博文　何十年どころか、もう7、80年ぶりぐらいと違う？
横谷　ずっと心に引っ掛かりながら、手は出せずっていう感じで…。
つる子　資料館にもお願いしていたと思います、その時に。でもなかなか忙しくて…。
高橋　でも、むやみに掘るものでもないんで。地下にあればまた、将来ちゃんと出るかもしれないんで…。そこから出るっていう話だったんで…。家を建てかえる時、確認しましょうかと。突貫工事だったんで一週間くらいで…。
つる子　違うところと両方、やっていらしていた。
高橋　そうなんですよ。
光子　まあ、いいもの出てきてよかった。
つる子　よかった。ほんと。ねえ、もう一つ、そばに小さいのも、ねえ…。
高橋　もう１個、はい。
博文　それは知らんかった。
高橋　はい。２組あったんですよ。
つる子　それは小さかったんよ。で、潰れてた。
博文　なくなっていたものはどこに行ったんですか。
高橋　かなり時間が経過したものですから、３千年前もね。
博文　ああ、災害とかね。
つる子　なんか、どこかで家を建てる時に、そこを発掘するために、ちょっとストップしますやろ。めんどくさいって埋め返していたことも聞きましたね。
博文　それまずいじゃない。
高橋　まあ、どうしようもないですね。
つる子　その時の家を建てたいときに建設にストップがかかってね。
横谷　私は実家が東京なんですけども、家の庭にものがあるから家が建てられないとか、そういう気持ちをなかなか想像が難しいので…。結構そういう方がここには多いと思うんですよね、縄文とかの遺跡が埋まっているっていう状況の方が。身近にそういったものが埋まっていたり…。さっき宝探しといわれていましたけども、どんな気持ちですか？　自分の土地にあって、所有物みたいな気持ちになったりするんですか？　時代はすごく隔たっているんですけど。
光子　自分のものっていう感覚はないと思うんですけど…。ここの地域は古くからあってっていうのはみんな知ってて…。それが自分の家の庭先から出てきたら、うれしいですね。自分のものっていうのではないです。そういうのが家の庭にも出てきた、うちにもあるっていうのがみんなワクワクするんじゃないかな。だから、よくこんなんでてきたんやけどっていって、お父さん呼びに行ったりとか。
つる子　出てきたらみんな、関心持ったんちゃうんかと思いますわ。それまでは、まさか…。
光子　西堀さんのとこからも出て、現地調査もあったから、みんなそれを見学したり、竪穴式住居を復元したりして、みんな…。
つる子　関心持つようになったな。
光子　わたしは出てくると嬉しかったです。
博文　耕地整理ってわかりますか？
横谷　耕地整理？
博文　田んぼが、昔はぐちゃぐちゃだったんですよね。区画整理して、きちんと道路造って、田んぼ一つを大きくするんです。そうしたときに大量の貝殻が出たんですよ。一面にダーッと散っていた。地面から１ｍ下に真っ黒けのがいっぱい出てきたんですよ。あっ食べとったんやな、って思いましたね。
横谷　それはいつですか？

博文　あんまり覚えてない。たしか、20年位前。
光子　貝殻しか出なかった？
高橋　僕が入ったころに杉沢がほ場整備だったんで、昭和60年前後？
博文　そんな前だった…。30年ぐらい前ですかね？
高橋　うん。たぶん。
博文　耕地整理っていうのは田んぼが段になるんですよ。その段にたくさん…。
つる子　高橋芳光さんもたくさん集めてはったね。
博文　ゴミ捨て場やないか、ってみんな言ってましたね。昔の人の。
光子　土器のかけらとか、細かいのばっかりだったから、多分ゴミ捨て場としてそれを捨ててたんでしょと。
博文　たぶんシジミやと思うんですよ。シジミしかおらへんやろと思うて。その当時シジミがいっぱい採れたから。
光子　そやから、地域の人は、どんどん興味をもって楽しんでます。
横谷　土器のかけらを見つけたのはこちら？
光子　田んぼからのかな？
博文　いやわかんない。
つる子　田んぼのは小さいわな。
（遺物を利用した小学生の作品を紹介）
光子　これは、小学校の時の夏休みの課題ですね。自分がとったやつだと思いますよ。おじいちゃんに拾っては、これ何って聞いたり…。伊吹山に上って、化石拾ってきてそれを集めたり…。多分これ５年生くらいだと思いますけど。
横谷　おじいちゃんは、自分で洗って、年代を考えたりとか、考古学者のようなことをワクワクしながらされてたんだ。
つる子　そうだね。
横谷　どんな方だったんですか？
光子　小学校の教員をしてまして。民俗学じゃないですけど、何でもっていうか…。すぐ近くに、樋口元さんという研究者がいらっしゃって、その方からいろいろ学んだのだと思います。植物にも詳しかったです。
つる子　（パンフレットを取り出す）この方が、中川泉三さんで、その時代にこれを発掘して…。
高橋　はじめに甕棺が出た時、昭和13年か、御主人が初めて見た時は小学生だったのかな。
光子　じゃあ、ものすごく影響を受けたんですね。
高橋　そう。前から、この辺の皆さんそういうの知っていらした。
光子　そうそう、小学校の時こうやったってお年寄りの方が良く言ってました。
横谷　この方が中川さんですか？
高橋　大野木というところの郷土史家。
つる子　これは、甕棺が出た時の新聞（図36）。
（新聞の記事で談義。発掘時に取り除いた庭の梅の木が話題になる）
横谷　その時の掘り返した梅の木ですか？
つる子　そうそう。
横谷　今も？
つる子　今も玄関に。早生で、普通の梅より早く咲きますね。きれいなもんです。石棒なんか出たのは、これとはまたちがいます？
高橋　資料館にあります。
つる子　あれは、稲村さんが…。
高橋　そうですね。稲村さんもですし、何本かあります。
横谷　こうやって出たものを、資料館へ寄贈をされている。お父様ですか、見つけられたものを寄贈されたのは。
高橋　というよりは、預かっている感じですね。
光子　我が家に置いといてもね…。庭先や玄関に置いといてもね…。役に立ちませんから。みんなに見てもらったほうが、子供さんたちもいっぱい勉強しにきはるでしょ。
博文　これ、なんですかね（テーブルに置いた石製品をさして）。
矢野健一　石皿。お皿。ここがたいらになってて、重しか何かに使うために、切り取られたものだと思います。ここの凹みで、すり石をつかって木の実をつぶして粉にしたりとか…。これも石器なので…。
高橋　誰が切ったんやろ。
矢野　どなたが切られたのか、石器とはわからずに…。藤田さんの土地に転がってた。御存じなかったですか？使われていなさそうだったので、捨てられているんだと…。西堀さんのところではなかったです。
光子　なんかいろいろ捨てたって言ってたやん。
博文　正直、僕は全然興味がなかった。だから、この石器も木の根っこの邪魔じゃないですか。トラクターの爪を悪くするので、どかすのがめんどくさくて…。全然わからないよね。
つる子　あっちの隅にも、こっちの隅にも、ちまちまとありますから。
光子　家の中にもまだある？　あれは石やったかな。遺

品整理していたらいっぱい出てきました。

つる子　家の軒先とかに、ちょこっとおいてます。

横谷　どれくらいあったか覚えていらっしゃいますか？

つる子　そんなにない。そんな整理してないから。

博文　いや、ここに山盛りあったと思います。

横谷　暇さえあれば、遺物を見つけたり…。そもそも見つけられる状況だった。

光子　そうですね。

つる子　それに集中してやってるし…。私は何気なしに気になって、見つけては洗ってました。小さいのなんか、私らにはわからんのよね。

博文　かけらなんて、どこにいってもいっぱい出てきますよ。

光子　家の息子が小学校の時に、朝のラジオ体操でちっとも帰ってこないんです。汗だくになってしばらくしてから帰ってくる。何してたのって聞くと、畑行って探してた、というようなこともしてました。

横谷　おじいちゃんの影響で、お孫さんがそうなった。

光子　私は、小さい時から知ってたから興味がないわけではないんですけど、ロマンがあるなって思いますね。古いものには、すごくロマンを感じます。

横谷　お子さんは今おいくつ？

光子　30を超えました。32か33です。

横谷　今も結構探されたり…。

光子　いやもうしてないですね。

つる子　もう就職してから全然やね。

光子　いっとき、その畑から恐竜の骨が出るんじゃないかと思って掘ってた時期もあるみたい…。まあ昔のことなんですけどね。地下から出てくるものに興味があったんだと思います。

つる子　出てきてそれをおじいちゃんに見せると、これはこうやと言ってもらえるのが楽しかったんだろうと思います。

矢野　じゃあ、この中にも、息子さんが掘られたものもある？

光子　いやどうかな、ほとんどないんじゃないかな。

つる子　伊吹山の頂上上がってもあるもんね、貝殻。

高橋　ウミユリとかフズリナとかね。

つる子　あれもよう探してました。

矢野　これもそうですよね（別の化石を取り出す）。

図35　左から藤田博文氏、藤田つる子氏、藤田光子氏

＊手前左の土器２点は藤田家敷地から発見された10号棺。手前中央は切断された石皿で切断面が見える。

光子　夏に一緒に上がって、道に迷ったときに見つけたものです。

つる子　伊吹山の頂上が琵琶湖の底の時の貝殻とか…。伊吹山が噴火して…。

光子　いや、噴火はしてない。

高橋　琵琶湖ではなくて、海の底だったんですよね。

光子　そうそう、海の底だったんですよね。

高橋　２億５千万年前のね。

横谷　でも、不思議ですよね。

つる子　不思議やな、そういうの。

光子　父は70超えてもまだ、夏に登っていましたね。

横谷　伊吹山の頂上で貝が見つかって、これはどこから来たんだろうって考えたりとか、耕地整理してて、シジミが見つかって、シジミを食べていたとか…。

博文　シジミとはわかっていないんだよね。シジミのように見えました。

横谷　すごくいろいろ想像してしまいますね、これはどこから来たんだろうって。その物からいろいろ考えていくっていうイメージが、この土地の方にはごく当たり前なのかなって思いました。身近にこういったものが出てくる状況って、（当たり前では）ないので、こうやってお話をうかがうだけで、私はすごくワクワクします。

光子　このあたりではとれない石もいっぱいありますもんね。サヌカイトとかね。（当時の）交易で…。

矢野　おじい様は、そういうことを知ってて…。

光子　そうですね。おじいさんはここら辺では、とれない石やけどって。

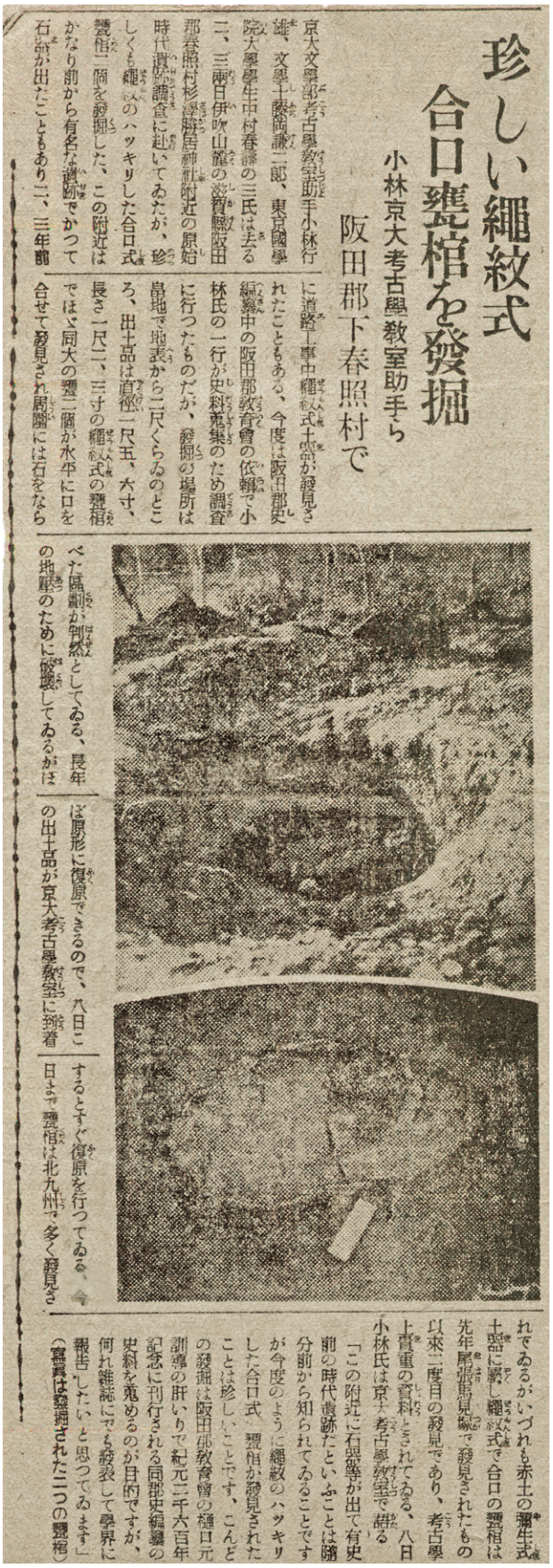
矢野　そうですね。これは矢じりですけど、サヌカイトとかを、よく使っています。2011・2012年の時は高橋芳光さんがすごくお元気で、村祭りの後ですけれど、こんなものがあるよって次から次へと見せてもらって。

光子　そうですね、元気でいはる人はほとんど…。

つる子　いないなあ。

矢野　お話を伺って、戦前の甕棺発掘の時に子供だった人たちが、すごく影響を受けて、そういう人たちが関心を持たれて…。その頃も新聞で報道されて…。日本中に名前が知れ渡っているんですけど、すごくインパクトがあったんですね。新聞記事に出るなんて（その頃は）そうそうないですからね。どうもありがとうございました。

（矢野・五味佑麻・林亮太）



珍しい縄紋式
合口甕棺を發掘
小林京大考古學教室助手ら
阪田郡下春照村で

京大文學部考古學教室助手小林行雄、文學士藤岡謙二郎、東京國學院大學學生中村春壽の三氏は去る二、三兩日伊吹山麓の滋賀縣阪田郡春照村杉浮游居神社附近の原始時代遺跡調査に赴いてゐたが、珍しくも縄紋のハッキリした合口式甕棺二個を發掘した、この附近はかなり前から有名な遺跡でかつて石器が出たこともあり二、三年前に道路工事中縄紋式土器が發見されたこともある、今度は阪田郡史編纂中の阪田郡教育會の依頼で小林氏の一行が史料蒐集のため調査に行つたものだが、發掘の場所は畠地で地表から二尺くらゐのところ、出土品は直徑一尺五、六寸、長さ一尺二、三寸の縄紋式の甕棺でほゞ同大の甕二個が水平に口を合せて發見され周圍には石をならべた區劃が判然としてゐる、長年の地壓のために破壊してゐるがほぼ原形に復原できるので、八日この出土品が京大考古學教室に到着するとすぐ復原を行つてゐる、今日よで甕棺は北九州で多く發見されてゐるがいづれも赤土の彌生式土器に對し縄紋式で合口の甕棺は先年尾張馬見塚で發見されたもの以來二度目の發見であり、考古學上貴重の資料とされてゐる、八日小林氏は京大考古學教室で語る「この附近に石器等が出て有史前の時代遺跡だといふことは隨分前から知られてゐることですが今度のように縄紋のハッキリした合口式甕棺が發見されたことは珍しいことです、こんどの發掘は阪田郡教育會の樋口元訓導の肝いりで紀元二千六百年記念に刊行される同郡史編纂の史料を蒐めるのが目的ですが、何れ雑誌にでも發表して學界に報告したいと思つてゐます」

（寫眞は發掘された二つの甕棺）

図36　戦前の杉沢遺跡発掘を報じる1938（昭和13）年４月の新聞記事（新聞名不明）

Ⅶ　寄託資料

丸本真治氏と稲村邦夫氏が米原市教育委員会に寄託した資料を報告する（表１、図37～45）。寄託資料の一部は既刊の報告書（『伊吹町文化財調査報告書』第３集）にも掲載されているが、あらためて図化した。

丸本氏寄託資料の土器片（図37）は縄文時代晩期のものが中心である（１～10）。１は波状口縁の深鉢破片で滋賀里Ⅲａ式もしくは篠原式併行期か。４も同時期の深鉢だろう。２は縄文時代晩期の突帯文土器に伴う浅鉢だろう。３・５～10も縄文晩期の土器片とみて問題はない。11は土師質の土器片。12・13は須恵器甕。14は８世紀の須恵器杯蓋。15は青磁片。古瀬戸か。16は中世の陶器片。

丸本・稲村両氏から寄託された石器（図38～42）は共に敲打痕が顕著に見受けられるものが多くあった（17・18・20・22）。

17は乳棒状石器。断面は円形に近い楕円形を呈し、上端部にわずかに敲打痕が残る。頭部の創出を意識していたと考えられるが、不明瞭である。底部には他の部位には見られない擦った形跡が見られ、乳棒のように何かを擂り潰すための道具として使用した可能性が考えられる。また、底部には見られないものの、側面部の敲打痕に赤色顔料の付着が確認できる（図43）。縄文時代のものではない可能性もある。花崗閃緑岩製。

20は小型石棒の先端部である。全体に丁寧な研磨が施され、断面形状はほぼ正円を呈する。ただし先端部に敲打痕が残る。表面に細い横方向の線が残っているが、意図的なものではないと考えられる。緑色片岩製。

18・19・22は石刀。18は敲打後の研磨段階にあたる未製品である。頭部を創り出し、頭部下端から身部に向かって徐々に幅が広くなる。敲打痕は頭部と峰部に顕著に残り、全体的に擦痕が認められる。身部は両面の頭部直下から中央部辺りまでは丁寧な研磨により仕上げられており、敲打痕や擦痕はほとんど残っていない。中央部以下の両面の平坦部には敲打痕が比較的顕著に残り、側縁部には斜方向の擦痕がみられる。また、頭部上端にも擦痕が認められる。峰部とした部分の研磨が不十分なことを踏まえると、本来は石剣を製作するつもりだった可能

表１　寄託資料観察表

№.	品　目	器形	部位	時　期	所蔵者	長さ×幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	色　調（表）	色　調（裏）	石　材	報告書掲載番号	備　考
1	縄文土器	深鉢	口縁部	縄文晩期	丸本真治	－	0.6	－	灰褐7.5YR5/2	灰オリーブ5YR4/2	－	－	－
2	縄文土器	浅鉢	口縁部	縄文晩期	丸本真治	－	0.5	－	褐灰5YR4/1	灰褐7.5YR5/2	－	－	－
3	縄文土器	－	口縁部	縄文晩期	丸本真治	－	0.6	－	にぶい褐7.5YR5/3	灰褐7.5YR5/2	－	－	－
4	縄文土器	深鉢	胴部	縄文晩期	丸本真治	－	0.6	－	灰褐7.5YR5/2	黄灰2.5Y5/1	－	－	－
5	縄文土器	－	胴部	縄文晩期	丸本真治	－	0.6	－	にぶい褐7.5YR6/3	灰褐5YR5/2	－	－	－
6	縄文土器	－	胴部	縄文晩期	丸本真治	－	0.6	－	灰褐7.5YR5/2	褐灰10YR5/1	－	－	－
7	縄文土器	－	胴部	縄文晩期	丸本真治	－	0.7	－	灰褐7.5YR5/2	灰黄褐10YR5/2	－	－	－
8	縄文土器	－	胴部	縄文晩期	丸本真治	－	0.6	－	灰褐7.5YR5/2	灰褐7.5YR4/2	－	－	－
9	縄文土器	－	胴部	縄文晩期	丸本真治	－	0.6	－	灰褐7.5YR5/2	灰黄褐10YR6/2	－	－	－
10	縄文土器	－	胴部	縄文晩期	丸本真治	－	1.0	－	灰褐7.5YR5/2	褐灰10YR5/1	－	－	－
11	土師器	－	胴部	－	丸本真治	－	1.0	－	にぶい褐橙7.5YR6/4	灰黄褐10YR6/2	－	－	－
12	須恵器	甕	胴部	－	丸本真治	－	0.8	－	黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y5/1	－	－	－
13	須恵器	甕	胴部	－	丸本真治	－	0.7	－	灰黄褐10YR6/2	黄灰2.5Y6/1	－	－	－
14	須恵器	杯蓋	口縁部	奈　良	丸本真治	－	0.8	－	灰5Y6/1	灰黄褐10YR6/2	－	－	－
15	磁　器	－	底部	中　世	丸本真治	－	1.0	－	にぶい黄橙10YR7/2	灰黄褐10YR5/2	－	－	古瀬戸?
16	陶　器	－	底部	中　世	丸本真治	－	1.3	－	灰5Y6/1	黄灰2.5Y6/1	－	－	－
17	乳棒状石器	－	－	縄文？	丸本真治	23.5×6.0	4.5	1200	－	－	花崗閃緑岩	『伊吹町文化財調査報告書』第３集 第39図-43	赤色顔料残存、敲打痕
18	石　刀	－	－	縄　文	丸本真治	17.6×3.7	1.5	210	－	－	ホルンフェルスまたは黒色片岩	『伊吹町文化財調査報告書』第３集 第48図-108	未製品、敲打痕・擦痕
19	石　刀	－	－	縄　文	丸本真治	8.9×2.3	1.6	65	－	－	ホルンフェルスまたは黒色片岩	－	被熱、欠損部は黒褐色
20	小型石棒	－	－	縄　文	丸本真治	9.1×2.0	2.0	70	－	－	緑色片岩	－	先端に敲打痕
21	御物石器状石製品	－	－	縄　文	稲村邦夫	9.3×3.5	3.1	200	－	－	泥質片岩	『伊吹町文化財調査報告書』第３集 第42図-67	上下面に敲打痕両側面に丁寧な研磨
22	石　刀	－	－	縄　文	稲村邦夫	9.3×3.9	1.7	105	－	－	黒色片岩	－	未製品か、全面に敲打痕敲打のち剥離が確認される箇所あり研磨の痕跡あり
23	磨製石斧	－	－	縄　文	稲村邦夫	9.2×5.2	2.2	165	－	－	チャート	『伊吹町文化財調査報告書』第３集 第40図-48	－
24	磨　石	－	－	縄　文	稲村邦夫	10.6×10.9	4.7	915	－	－	玄武岩	『伊吹町文化財調査報告書』第３集 第38図-30	－
25	叩　石	－	－	縄　文	稲村邦夫	9.5×7.6	4.0	545	－	－	玄武岩	『伊吹町文化財調査報告書』第３集 第38図-31	－
26	石冠？	－	－	縄　文	稲村邦夫	4.2×3.7	2.7	52	－	－	砂岩	－	もしくは鏃節形石製品
27	土製品	－	胴部	－	丸本真治	－	1.7	－	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	－	－	－
28	土製品	－	－	－	丸本真治	3.3×3.5	1.9	30	－	－	－	－	一字一石経類似品？
29	土製品	－	－	－	丸本真治	3.3×4.0	1.9	30	－	－	－	－	一字一石経類似品？
30	土製品	－	－	－	丸本真治	3.2×3.8	2.2	30	－	－	－	－	一字一石経類似品？

性もある。愛知県真宮遺跡に同様の形態をした有頭石剣があるが、こちらは18よりも身部に厚みがある（斎藤2001）。敲打痕に赤色顔料が付着している可能性がある。ホルンフェルスまたは黒色片岩製。

19は石刀の先端部。刃が明瞭につけられており、峰にあたる部分は丸みを残さず、平坦に形成されている。秋山浩三氏の編年に従えば、断面形状が比較的シンメトリーを呈して整っていることから、晩期中葉頃の製品とみられる（秋山1991）。全体的に赤変しており、表面の剝落も認められることから被熱していると考えられる。ホルンフェルスまたは黒色片岩製。

22は石刀の未製品。敲打したのちに剝離を行っており、さらに縦方向に研磨が施されているのも確認できる。一般的に小型石棒類の製作は剝離、敲打、研磨の順に作業を行うが、工程が戻る様子は三重県佐八藤波遺跡などでも認められている（長田2006）。刃は明瞭ではないものの、一側縁が平坦に形成されていることから石刀と判断した。端部は尖らず、敲打で鑿のような形に形成されている。黒色片岩製。

21は御物石器状石製品である。軽く湾曲しており、底部と思われる部分は平坦に形成されている。底部と内湾部を中心に細かい敲打痕が顕著に残る一方、両側面は、特に端部側に丁寧な研磨が施されている（図45）。類例としては奈良県橿原遺跡、石川県御経塚遺跡、岐阜県家ノ下遺跡で御物石器、もしくは御物石器状石器と報告されているものが挙げられる（松田編2011、高堀編1983、

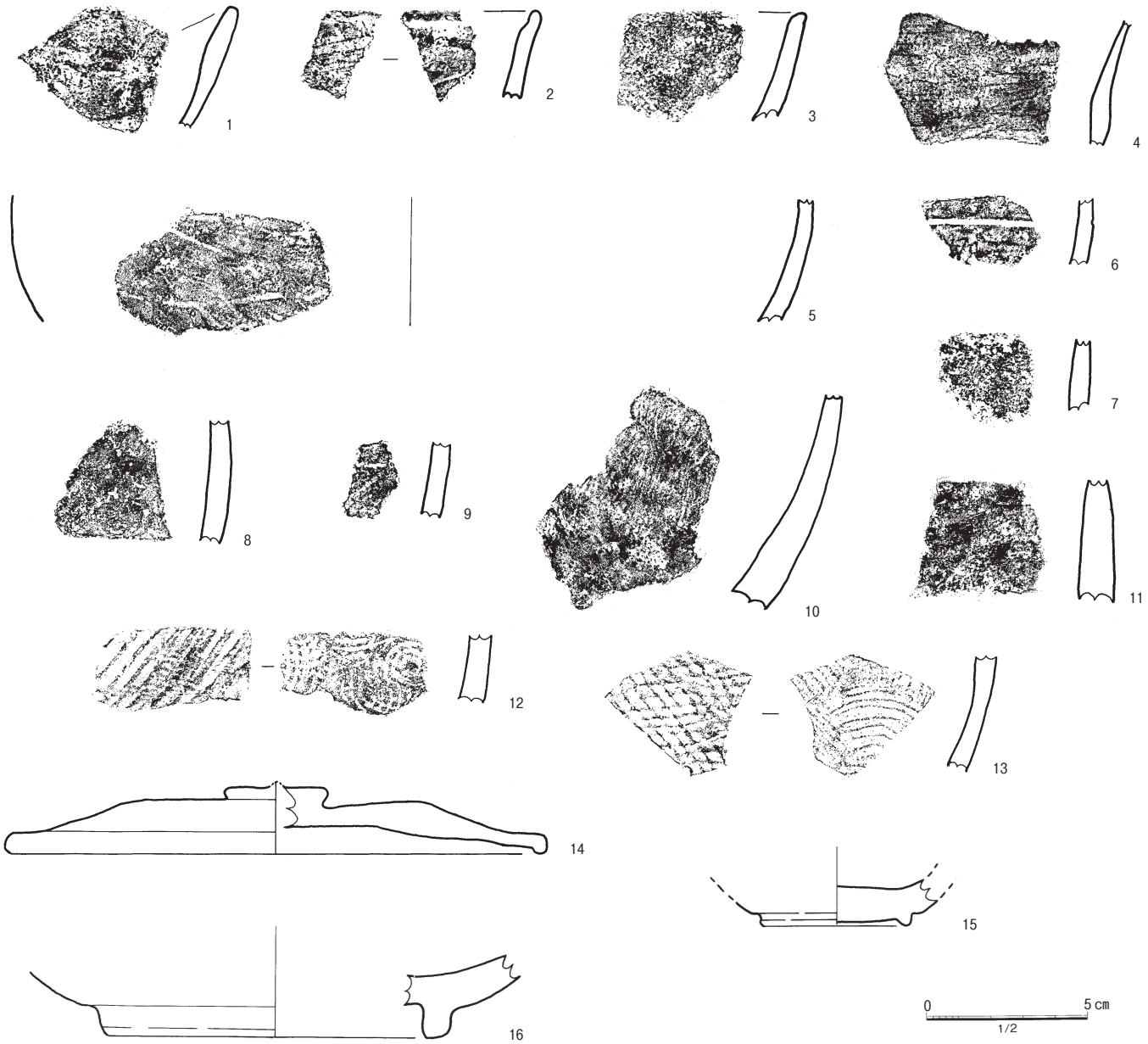


図37　寄託資料①

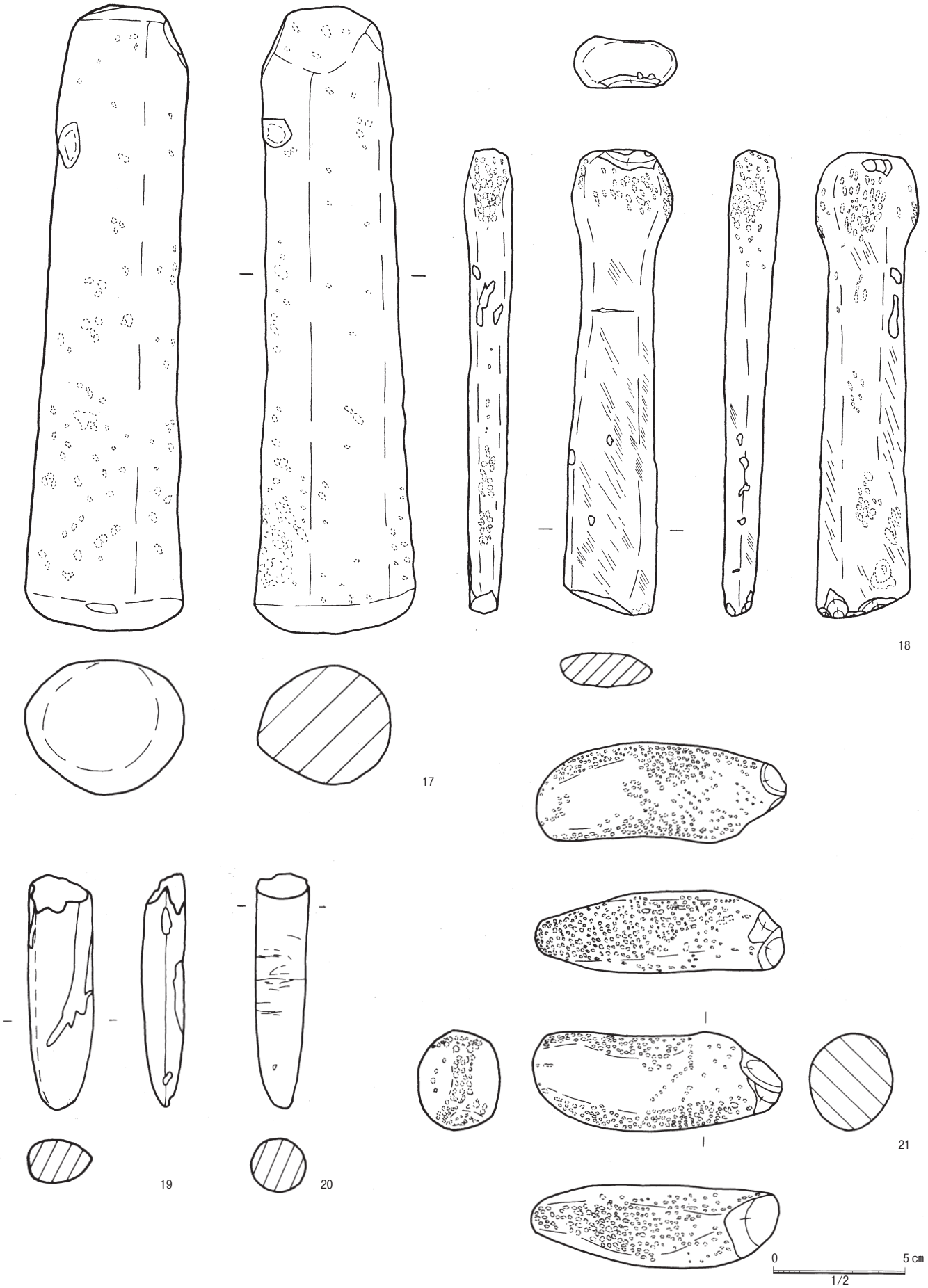


図38　寄託資料②

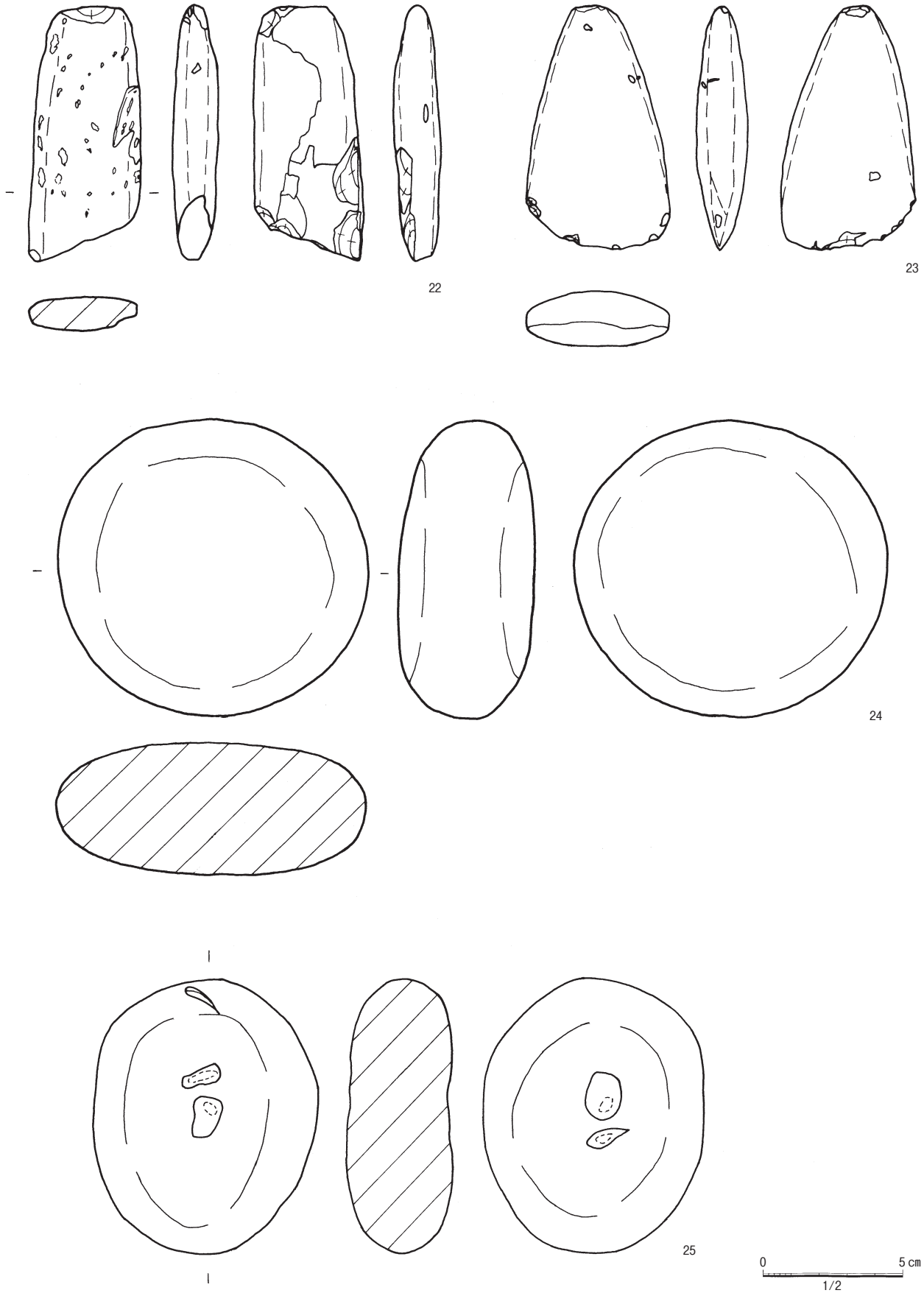


図39　寄託資料③

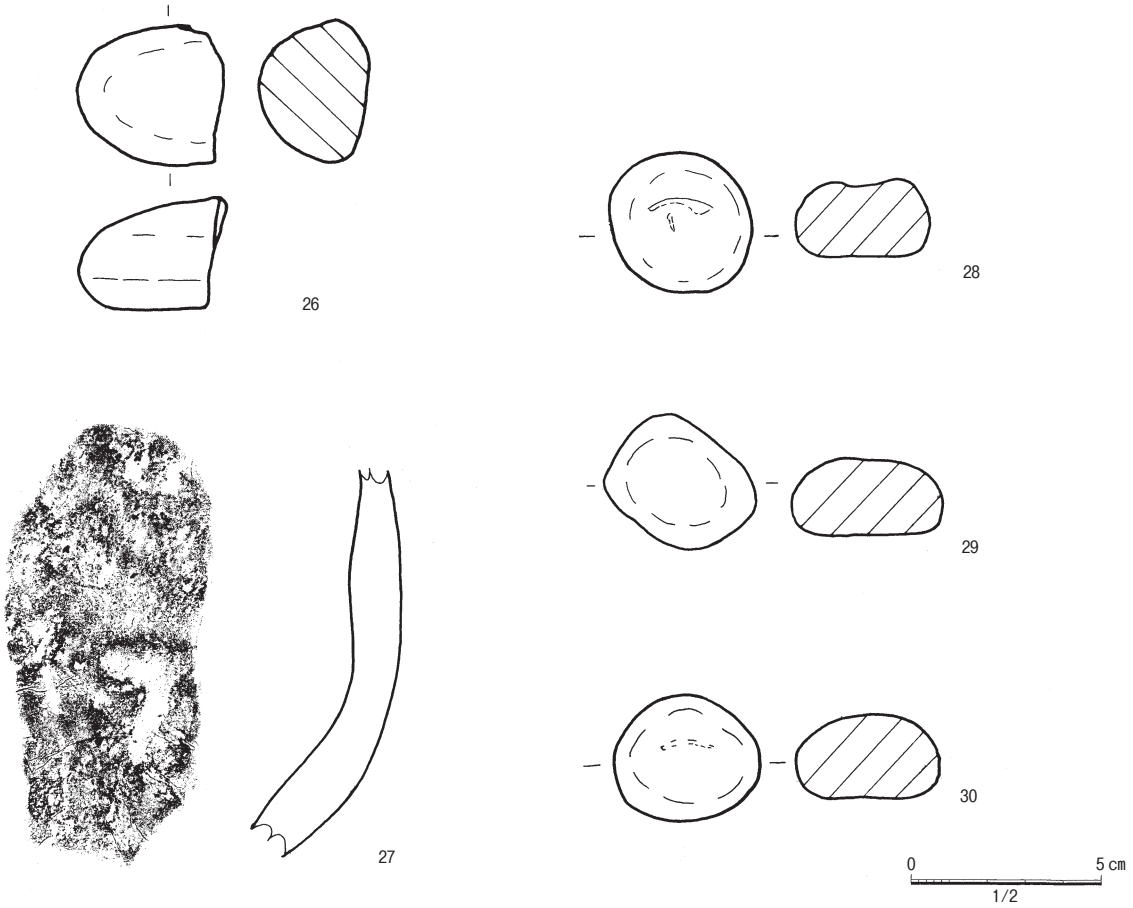


図40　寄託資料④

図41　乳棒状石器（17）

図42　石製品（18～22・26）

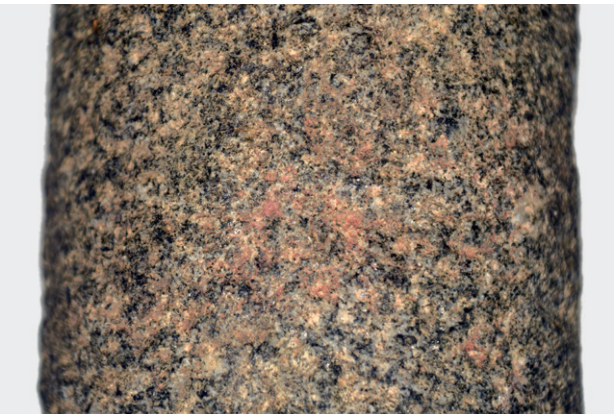


図43　乳棒状石器（17）の赤色顔料付着部分

図44　土製品（28）

林ほか1997）。泥質片岩製。

23は磨製石斧。チャート製。24は磨石。玄武岩製。25は叩石。両面に敲打痕がある。玄武岩製。

26は一面が平坦で、他の面が円弧状に形成され、断面が山のような形をした石製品である。石冠と考えられ、吉朝則富氏がⅠ型とする、いわゆる球頭状石冠の一部である可能性がある。しかし、底部に当たる平坦面に凹みが見られないことから、北陸や飛騨、九州地方で出土している鰹節形石製品の小片である可能性も考えられる。鰹節形石製品は、球頭状石冠の男根状の部分を取り除いたような形状のもので、そのほとんどが平面部に凹みを持たず、凹みを持つものは例外的と考えられている（吉朝2004・2010）。

27は土師質の土製品（図40）。湾曲しており、大型の土器の可能性もある。両面とも凹凸が顕著。

28・30（図40）は白色の土製品で砂粒は全く含まない。

図45　御物石器状石製品（21）端部

表面に赤い顔料で文様が描かれており（図44）、この文様は梵字とも捉えることが出来るため、一字一石経に類似したものかと思われるが、詳細は不明。29（図40）も同質の土製品で赤い顔料は残っていないが同様の土製品と考えられる。　　（小野大輔・矢野・日口菜穂）

参考文献

秋山浩三1991「縄文時代石刀の変遷～京都府瑞穂町中台遺跡の採集例をめぐって～」『京都考古』第62号、京都考古刊行会

長田友也2006「三重県伊勢地域における縄文時代晩期の石棒類製作遺跡―伊勢市佐八藤波遺跡出土資料を中心に―」『縄文時代』第17号、縄文時代文化研究会

斎藤義彦2001『国指定史跡真宮遺跡』岡崎市教育委員会

高堀勝喜編1983『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会

林　直樹ほか1997『家ノ下遺跡発掘調査報告書』岐阜県・宮川村教育委員会

松田真一編2011『重要文化財橿原遺跡出土品の研究』（橿原考古学研究所研究成果第11冊）、奈良県立橿原考古学研究所

吉朝則富2004「飛騨における石冠研究の現状と課題」『かにかくに』（八賀晋先生古稀記念論文集）、八賀晋先生古稀記念論文集刊行会

吉朝則富2010「かつをぶし形石器考」『平成20・21年度光記念館研究紀要 自然科学』第６号、光記念館

Ⅷ　ま　と　め

今回の杉沢遺跡発掘の成果と課題を記す。

（1）調査地１では縄文時代の包含層を確認できなかった。遺物の量が少なく、今後の更なる調査や分析を必要とするが、2012年度のＴ１調査区に比べて調査地１の縄文時代の堆積層がより低いところに存在する可能性はある。その場合でも、調査地１では縄文土器の出土点数は非常に少ないため、縄文時代の人間活動が集中した範囲を超えている可能性は高い。すなわち、今回の調査地１の１-Ｅ区北辺より北側に縄文時代の人間活動が集中した範囲が限定できることになる。この境界は自然流路によって形成された地形的な境界であろうと推測できる。実際、１-Ａ区の最下部から自然流路を検出している。このように、縄文時代の人間活動が集中した範囲を集落とみなすのであれば、杉沢遺跡の縄文集落の南端の境界の一部を確認できたことになる。

（2）調査地１では、１-Ａ区から上部の第２層から15世紀末から16世紀にかけての土師器や中近世の陶磁器片も多く出土している。調査地１では第２層上面で土坑や柱穴を確認している。遺構からの遺物量が少ないので、遺構の時期を判断するのは難しいが、玉泉寺の開山が1515年であり、玉泉寺と関係する建物の遺構である可能性は高い。１-Ａ区では地表下約１ｍ以下では遺物の出土が非常に少なくなり、地表下約２ｍまで礫層が堆積する。この礫層の最下部で土師器片を検出しており、おそらく中世後期の一時期に礫層が短期間に堆積し、その後、玉泉寺の建物が建てられたと推測できる。ただし、土砂の堆積や遺構の時期を限定する必要がある。

（3）調査地２の２区では、調査地１と同様、地表下約２ｍまで縄文時代の包含層は確認できなかった。ここでも調査地１と同様、地表下約１ｍで遺物の出土はほぼなくなり、その下部に礫層が続く。２区でも礫層上面に堆積した地層からは15世紀末から16世紀にかけての土師器の出土が確認でき、礫層の堆積が中世後期の一時期に堆積した可能性がある。ただし、調査地１と同様、土砂の堆積や遺構の時期を限定する必要がある。調査地２では縄文土器片の出土は確認できなかった。

（4）調査地１で出土した縄文土器片には縄文晩期以外のものと積極的に判断できる土器片は検出できなかった。この点は、2011・2012年度の調査区と同様である。

（5）発掘と併行して、遺物の出土位置を再現して展示する試みを美術家と共同で実施した。展示と発掘の様子は、下記のようにインターネットで公開されている。

米原市役所YouTubeチャンネル「杉沢遺跡発掘調査市教育委員会×立命館大学」

https://www.youtube.com/watch?v=-k8kS3lXWnE

facebook　芸術と考古学「time, timer, timest－夏休みの遺跡－」

（矢野）

発掘参加者（立命館大学学生）＊順不同

吉田里水　日口菜穂　山本雅俊　鈴木大輔　吉川真矢
西山集　五味佑麻　進藤郁美　近藤芽衣　土屋洋子
藤原亮太　宮浦壱盛　下原哲史　紀平知里　佐々木周
小野大輔　原田潤一　福田素子　信藤水希　西久保明音
土子舞琴　中野滉介　置本一馬　宮下大輝　岡智康
島倉太一　森本のぞみ　寺田春輝　髙井智香
LEE AENA　牧野絢介　鈴木紀香　小澤麻帆　藤岡輝
湯舟深優　佐々木晴加　山下拓也　井幡美歩　廣瀬由佳
森田実和　吉田知世　佐藤拓　多鹿怜央　北祐介
坊知理　磯田博基　入柿晴香　松山侑揮

図46　杉沢区集会所での展示作業

図47　小学生体験発掘

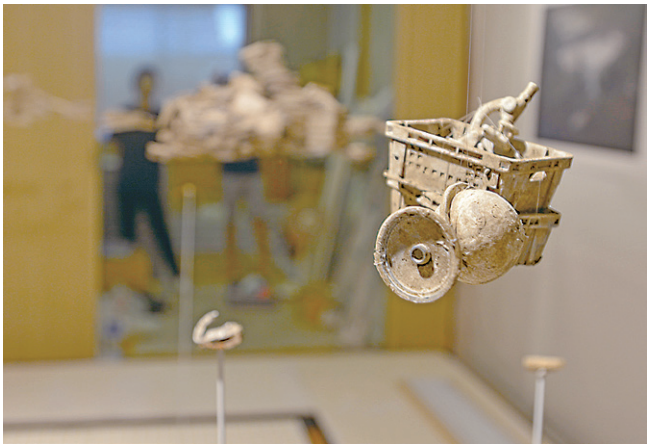
＊裏表紙写真（上）宿舎と発掘参加者、（下）横谷奈歩自作模型展示
（撮影：牧野和馬）

報告書抄録

ふりがな	すぎさわいせき2017ねんどはっくつちょうさがいほう
書　　名	杉沢遺跡2017年度発掘調査概報
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	立命館大学文学部考古学実習研究報告
シリーズ番号	第３冊
編著者名	矢野健一・鈴木大輔・小野大輔・小川香菜恵・吉田里水・進藤郁美・西山集・吉川真矢・五味佑麻・日口菜穂・藤原亮太・林亮太・北村天音・滋賀県立米原高校地学部
編集機関	立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻
発行機関	立命館大学文学部
所 在 地	〒603-8577　京都府京都市北区等持院北町56-1　電話075-465-8187（文学部事務室）
発行年月日	2020年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
杉沢遺跡（すぎさわいせき）	滋賀県米原市（しがけんまいばらし）杉沢（すぎさわ）	252140	462-022	35°22′14.5″	136°23′14.5″	2017.8.9～2017.8.31	約44㎡	遺跡範囲確認

種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落・墓跡	縄文時代晩期～現代	土坑・柱穴	縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器	



立命館大学文学部考古学実習研究報告第３冊
杉沢遺跡　2017年度発掘調査概報

発行日／2020年３月31日
編　集／立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻
発　行／立命館大学文学部
印　刷／真陽社